

温泉地域研究

第5号

2005年 9月

論文

- 近代における別府温泉郷の形成過程 浦 達雄 (1)
別府温泉郷における地獄の観光開発と地獄組合 中山昭則 (13)
国民保養温泉地・四万温泉の地域変容 小堀 貴亮・山村順次 (23)
中国大連龍門湯温泉の開発と温泉利用 于 航・山村順次 (31)

基調講演

- 阿智村の観光政策 岡庭 一雄 (41)

シンポジウム

- 昼神温泉のまちづくり (45)

資料

- 温泉感性論に向けて—折口信夫の「山の湯雑記」 森 繁哉 (51)

- 学会記事 (53)

日本温泉地域学会

近代における別府温泉郷の形成過程

Formation Process of Beppu Spas in the Modern Era

浦 達 雄*

Tatsuo URA

キーワード：別府温泉郷 (Beppu spas)・観光開発 (tourism development)
旅館経営 (hotel management)・観光客 (tourist)

1 はじめに

別府温泉は別府温泉郷（通称別府八湯）の1つで（図1参照）、別府温泉郷の中核的な温泉地として果たした役割は実に大きい。別府温泉の形成過程において、2つの時期で大きな変革がみられる。その1つは明治初期から昭和初期、いま1つは高度経済成長期である¹⁾。

ところで、山村順次の一連の研究²⁾によれば、温泉地は一般的な傾向として、低次の療養温泉地（湯治場）、そして保養温泉地（湯治場と観光温泉地の中間型）、さらに高次の観光温泉地への変質過程を経て、最終段階として温泉観光都市の段階に達することが明らかにされた。別府温泉は、近代において温泉地域形成が急展開した全国的にも稀な事例であり、その近代化過程と実態を解明する意義は大きい。つまり、別府は近代においては療養温泉地を克服し、保養温泉地としての機能を拡充し、さらには観光温泉地として発展基盤を確立したのである。

本稿の目的は、明治・大正期から昭和初期までの時期を対象として、近代における別府温泉郷、特に別府温泉の形成過程について考察することである。その際、交通・温泉・土地開発などの事象を追うとともに、温泉地形成者としての旅館経営者や観光関係事業者の系譜や性格を明らかにし、地域形成の意義を解明することにしたい。研究の方法は、

郷土史・観光案内書・当時の旅館名簿など各種文献³⁾を分析し、郷土史家や旅館関係者に対する聞き取り調査を行った。なお、別府温泉郷を事例とした近年の観光地理学的な研究成果としては、山村・浦・中山・小堀などの報告⁴⁾があり、参考とした。

2 交通の近代化と流川界隈の変化

(1) 別府港の築港と鉄道の整備

1871（明治4）年5月、4万円もの県費をかけて別府湾に面する流川河口付近の楠浜に近代的な別府港が竣工し、海路による交通が一段と利便性を増した⁵⁾。1873年には、大阪開商社の益丸が1ヵ月に1回寄港することになった。益丸は西洋型木造蒸気船（18トン）で、別府—大阪間を30日間要したと言われている。ここに、船問屋を開業する者が登場したが、その代表は別府村有数の素封家である府内屋（後の日名子旅館）の日名子太郎である。その後、大阪商船（関西汽船の前身）や宇和島運輸など、大手海運会社が別府航路に参入し、貨物や乗客の取り扱った。ここに、大阪・四国方面との結びつきが強化された。

これに対して、陸上交通では豊州電気鉄道（別大電車）が1900年に開通した。続いて1911年には、現在のJR日豊線の別府駅が開業して北九州方面と直結され、炭鉱関係者などが観光客あるいは別荘の所有者として数

* 大阪明浄大学観光学部 (Osaka Meijo University)

多く別府を訪れようになった。その背景には、1894年～1895年の日清戦争、1904年～1905年の日露戦争による経済の好況もあった。

その後、大阪商船は1916年に木造棧橋の建設によって汽船の発着を開始し、1920年には待合所やコンクリート固定棧橋を建設し、毎日の出航体制が出来上がった。さらに、1929年には董丸を就航させて、昼夜2便体制を確立したのである⁶⁾。

(2) 明治初期の旅館と商家

別府港の築港に対して、地元の素封家や有力者が資金の調達をした。これらの有力者は流川下流域で新たに土地を取得し、旅館業や船問屋に参入した。海運業の発展を見越しての投資であった⁷⁾。『豊後国速見郡村誌』(大分県1885)⁸⁾は、1877年前後の別府の様子を記した貴重な文献である。当時の別府村の旅館数は40軒を数え、周辺地域では浜脇30軒、亀川10軒(亀川8軒、野田2軒)、鉄輪34軒、鶴見(明礬)10軒、南立石18軒(観海寺8軒、堀田10軒)などであり、現在の別府温泉郷では142軒を数える。同誌によれば、貸席は別府に10軒、浜脇に4軒あった。

別府温泉の旅籠(自炊入湯宿を含む)は24軒が記載されている。その経営形態は旅籠屋(入湯宿)専業7軒、兼業17軒となっている。兼業の内訳をみると、貸座敷8軒や船問屋7軒などに特化している。この時期には、旅館業の専門化はまだまだ進んでいなかった。経営者の氏名をみると、先住者・素封家のほか、外来者の名前が散見される。

旅籠の分布を町別にみると、小倉街道8軒、流川・楠濱16軒を示し、流川から楠濱にかけて、集積していることが分かる。貸座敷は2軒が専業で、兼業は5軒である。旅籠との兼業の8軒を含めると、15軒の貸座敷が成立している。町別では、流川9軒と楠濱6軒となり、小倉街道沿いには1軒も営業をしていない。こうしたことから、名残橋付近の花柳界としての繁栄を読み取ることが出来

る。別府村における市街諸家商の一覧によると⁹⁾、1888年現在、59軒の商家が掲載されており、町別では流川21軒や楠濱16軒が多く、別府港に近い立地条件のよさが商家の集積をもたらしたのである。

3 温泉開発と温泉浴場

(1) 温泉開発

明治初期の『日本鉱泉誌』(内務省1886)¹⁰⁾によると、大分県豊後国の項で、次のような記載がある。別府村別府鉱泉として楠湯・不老ノ湯・長石ノ湯・中津屋ノ湯・野田湯の温泉浴場が掲載されており、浴客は1年平均で1万630人、濱脇村濱脇温泉として東温泉・西温泉、逆旅40余戸、浴客1万1,340人、南立石村観海寺鉱泉として客舎10余戸、浴客3,219人、南立石村上ノ田鉱泉として、浴客未詳、南立石村堀田鉱泉として、逆旅11戸、浴客3,176人、鉄輪村鉄輪鉱泉として洪ノ湯・熱ノ湯、浴客8,000人、野田村柴石温泉として逆旅2戸、浴客800人、野田村湯ノ森鉱泉として御夢想ノ湯と称す、亀川村蕩耶鉱泉として客舎13戸、亀川村平田鉱泉として浴客3,500人、鶴見村地藏鉱泉として客舎7戸、浴客2600人などと記されていた。現在の別府温泉郷の範囲では、年間おおよそ4万3,000人程度の入湯客があったと推定できる。

その後の別府温泉の発展は、まさに新しい温泉掘削法による温泉開発が急増したことに原因がある。明治中期までは、温泉は自然のままの温泉(自然湧出泉)が簡単な道具で掘った掘湯による湧出のみであった。その後、土総掘りと言われる竹のバネを使った人工掘削技術が導入され、源泉数が急増することになったのである。

鉱山監督官である松田繁が大分県知事に提出した報告書により、1905年現在における別府温泉(別府と浜脇)の温泉掘削状況を整理した(表1)¹¹⁾。源泉数は198孔を数え、地域別では、別府166孔、浜脇32孔であった。その内訳は、穿湯173孔、掘湯25孔であり、

表1 別府温泉における温泉掘削状況
(1891～1905年)

年次	別府温泉		浜脇温泉		計		合計
	掘湯	穿湯	掘湯	穿湯	掘湯	穿湯	
1891(明治24)	17	1	2		19	1	20
1892		3				3	3
1893							
1894	2				2		2
1895		3				3	3
1896		2				2	2
1897		4				4	4
1898	1	7		1	1	8	9
1899		7				7	7
1900		17				17	17
1901		18				18	18
1902		22		3		25	25
1903		24	1	4	1	28	29
1904		21		17		38	38
1905	1	5		2	1	7	8
年次不明		11	1	1	1	12	13
計	21	145	4	28	25	173	198

(注) 松田繁(1905):『別府濱脇町鉱泉ニ関スル取調書類』により作成。数字は孔数。別府温泉郷のうち別府と浜脇を示す。

上総掘りの技術を導入した穿湯が多いことが分かる。この書類によると、別府の豪商であるたばこ屋主人の荒金猪六が1882年に掘削したものが最も古い。その分布をみると、源泉は流川沿いと旧国道沿いに集中している。旅館・商店・自宅などで掘削したケースが多く、その後も温泉の乱開発が進んだ。その結果、1911年現在の源泉数は593孔を数え、所有形態は町有源泉24孔、私有源泉569孔であった。1905年では198孔であり、6年間で371孔の源泉が掘削された計算になる。上総掘りの導入で、内湯を完備した旅館が増加した。

1923年現在、別府温泉郷の源泉数は1,584孔であった¹²⁾。地区別では、別府・浜脇が1,175孔で74%を占め、次いで亀川の354孔22%が多く、その他では鉄輪15孔、明礬28孔、観海寺12孔であった。1932年現在の温泉孔数は、別府市全体で2,482孔を数えた¹³⁾。1923年と比較すると、別府・浜脇を除く周辺部の町村において温泉開発が顕著であった。

(2) 温泉浴場

明治維新の1868年における温泉浴場は別府村に9カ所、浜脇村に2カ所と記載されていた¹⁴⁾。その後、1874年には県費によって不老泉・紙屋温泉・浜脇東温泉などが新築された。こうした温泉浴場の新築を契機として、その後、新規開業では1892年の霊潮泉、1899年の寿温泉、1909年の柳温泉など、改築(新築を含む)では1902年の不老泉、同年の竹瓦温泉などが整備され、明治中期以降、共同湯を中心に温泉集落が形成されることになった。

(3) 温泉行政

大分県は1912年6月5日、大分県訓令32号で鉱泉取締規制を設け、泉源の保護対策を開始した¹⁵⁾。1906年4月、別府と浜脇の両町が合併し、新しい別府町が誕生した。そこで1909年には、別府町上等温泉取締規定・入湯人待遇方法・海岸砂湯管理規程を公布し、不老泉・浜脇西温泉の上等温泉は有料の町営温泉となった。その際、温泉事務員を設置したが、これが温泉行政の嚆矢となった。1911年には温泉課を新設し、助役がこれを兼務して温泉の管理や観光宣伝に力を注いだのである。1918年には別府町温泉調査会を設置し、温泉資源の調査を開始した。1924年に別府市が発足すると、専任の温泉課長が置かれ、温泉係と補勝係(現在の観光係)に区分された。1936年には観光係を観光課に分離し、温泉課は温泉行政に専念することになった。

4 土地開発の進展

(1) 耕地整理による街区の整備

別府の土地開発は、1911年に現在のJR口豊線が開通した頃から始まった。その代表は、別府町当局による市区改正、つまり耕地整理である。旧態依然とした曲がりくねった道路を格子状に区画する一大事業である。その結果、1928年には、碁盤目状の道路区画が完成した。当時の別府のメインストリート

である流川通りの拡幅は1917年、別府港に面した海岸通の全通は1918年である¹⁶⁾。こうした道路整備は、別府港に面する海岸通りの旅館立地を推進することになった。

(2) 海岸埋立地

図1と表2は、別府市にける海岸埋立地と別荘地の開発状況を示したものである。海岸埋立地は別府港の南側が最初であり、1911年に始まった。最初は松原地先埋立会社（奈良県の伊藤世民ほか2人）が実施したが、工事は台風で頓挫して倒産した。その

後、1919年に別府土地信託（後の別府土地）という大阪資本が工事に入って、第1区（北側の埋立）は1921年、第3区（浜脇海岸）は1924年、2区（中央部）は1928年に竣工した。こうした埋立地には、その後、公共施設や旅館が進出した¹⁷⁾。

浜脇海岸は1928年開催の中外産業博覧会の第2会場となり、さらに、浜脇の素封家である高橋欣也は泉孫旅館の別荘として聴潮閣を1929年に開業した。1931年には温泉施設である霊砂泉も開業したが、1952年の

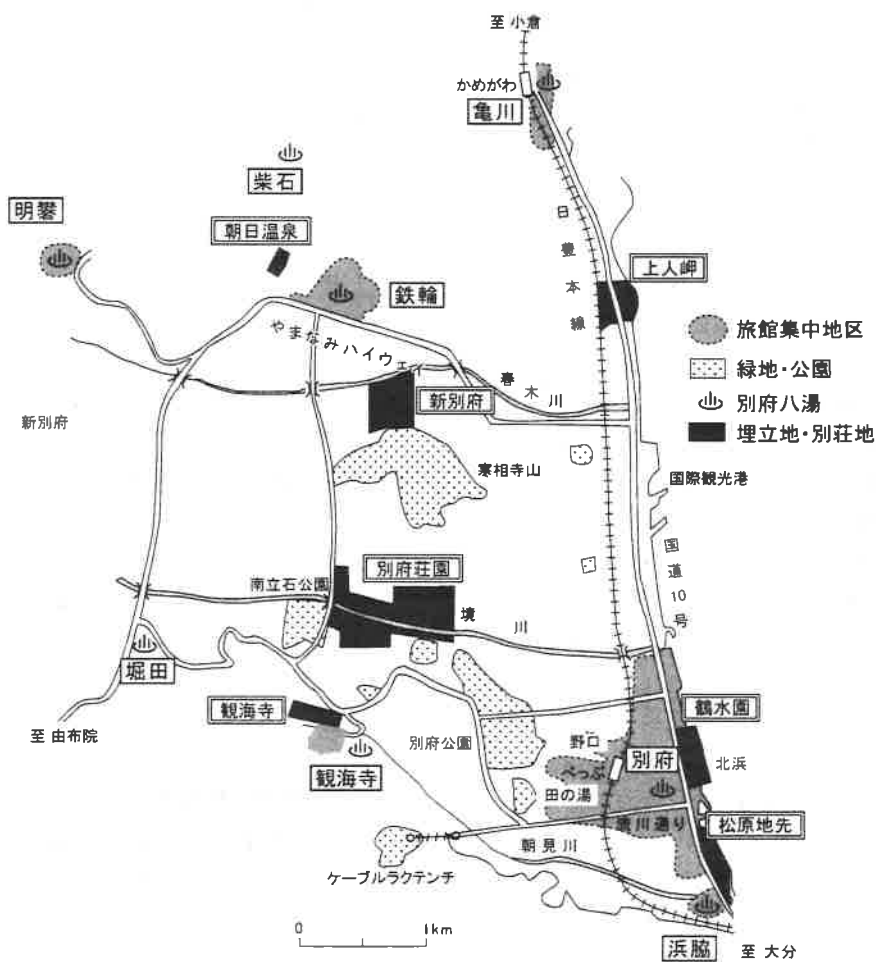


図1 別府温泉郷における海岸埋立地と別荘地の展開（1928・1978年）

(注) 山村順次（1978）原図に昭和初期（1928年）の海岸埋立地と別荘地を付加。
の地名は別府八湯。の地名は海岸埋立地と別荘地。

表2 別府温泉郷における海岸埋立地と別荘地の展開（1909～1955年）

立地	地区	開発主体	代表者	開発時期	開発面積
海岸埋立地	松原地先	松原地先埋立会社 別府土地信託㈱	伊藤 世民 橋本 喜造	1911（明治44）年～ 1918	3万坪
	1区（北側）	別府土地信託㈱	橋本 喜造	～1921	
2区（中央）	別府土地信託㈱	橋本 喜造	～1928		
	3区（南側）	別府土地信託㈱	橋本 喜造	～1924	
	鶴水園	中央別府温泉土地㈱ 清水産業㈱	柴谷善次郎 清水栄次郎	1915 1927	1.6万坪
別荘地	野口・田の湯	麻生商店など	麻生 太吉	1909	
	上人岬海濱	国武合名会社、国栄合資会社	国武金太郎	1933～1943	1万坪
	新別府温泉	新別府温泉土地㈱	千寿 吉彦	1914	5万坪
	朝日温泉	新別府温泉土地㈱	千寿 吉彦	1914	6,000坪
	観海寺温泉	別府観海寺土地㈱	上田弥兵衛	1920～1927	3.2万坪 6万坪
		別府観海寺土地㈱	国武金太郎	1927～1933	
		国武合名会社、国栄合資会社	国武金太郎	1933～1943	
		泉都土地会社	鶴 真吾	1934～1955	
別府荘園	泉都土地建物㈱	石坂 一馬	1955	9.1万坪 13万坪	
	別府観海寺土地㈱	上田弥兵衛	1920～1927		
	別府観海寺土地㈱	国武金太郎	1927～1933		
	国武合名会社、国栄合資会社	国武金太郎	1933～1943		
	泉都土地会社	鶴 真吾	1934～1955		
	泉都土地建物㈱	石坂 一馬	1955～		

（注）岡橋（1920）・稗田（1925）・別府観海寺土地（1925）などの資料により作成

ルース台風で全壊した。

現在、北浜海岸の旅館集積地となっている鶴水園埋立地は、1914年の起工である。開発主体は大阪資本の中央別府温泉土地であった。鶴水園には、第2次世界大戦前においては、1922年に花菱旅館、1923年に旅館二條館、1928年に旅館大吉、1931年に清風荘などが進出し、旅館街としての素地を形成した。

（3）別荘地の開発

別荘地の開発は、現在のJR別府駅の裏手から山の手方面で行われた（図1）。明治末期から別府駅の裏側、つまり現在の野口や田の湯地区で、麻生商店が分譲したとされているが、これを裏付けるデータは不足しており、詳細は未定である。しかし、現在の民宿田の湯館は1911年から1913年にかけて現在のJR日豊本線工事関係者が別荘として建設したものである。

また、田の湯では大分県安心院町出身の石川喜十郎が、1907年に400坪の敷地に自宅を建設した。彼は農家の次男で、その後トンネル技師となり、山梨県の笹子トンネル工事で財を成して別府在住となった。大正期に

入って、田の湯で紅葉館という旅館を買収し、関係者が経営していたが、喜十郎が死去したこともあって、土地（300坪）を財務局に物納した。家屋は石川家が所有して貸間にしてあったが、1973年頃売却となった¹⁸⁾。さらに、1910年頃、福岡の炭鉱王である麻生太吉が五六庵（現在の中央公民館）や程道庵を買収して別荘としており¹⁹⁾、当時から田の湯界限が別荘地帯として機能していたことが推定できる。野口地区の野口病院は1922年7月に開設されたもので、炭鉱で財を成した佐藤慶太郎が自分の別荘地の一部を寄贈したものである。

これらの別府温泉での別荘開発に対して、郊外の別荘地開発は大規模なものであった。朝日村の新別府、石垣村の別府荘園・観海寺などで別荘地の開発が進展した。新別府の開発は、鉄道工事で来別していた千寿吉彦が行った。彼は大分県竹田の出身で、最初は1910年に海地獄を買収し、その後1914年に新別府温泉土地を設立したのである。大阪・東京など大都会の戦争成金を対象として温泉付土地を分譲した²⁰⁾。

別府荘園と観海寺における別荘地は、当初、別府観海寺土地という大阪資本が開発した。表3は別府観海寺土地(株)の株主構成について示したものである。株主は724人、持株数は7万4,491株となる。1人当たり株数は103株を示す。株主は都道府県と主な都市別にまとめると、大分県の357人が筆頭で、以下、大分市199人・大阪市58人・神戸市11人・福岡県10人と続く。株数では、大分県1万3,238株、大阪市1万628株・大分市5,555株・大阪府4,685株となる。海外では、朝鮮半島や中国大連市からの投資家が見られる

が、これは当時の別府の国際性の一端を示している。

観海寺では、土地6万坪と旅館全部を買収して別荘地の開発を目論んだ多田治平が、1928年開催の中外産業博覧会開会の直前に病死し、会社で内紛が生じた。その後、経営者は交代し、株主であった福岡県久留米の資本家(久留米緋開発者)である国武金太郎が経営の実権を握ることになった。しかし、観海寺では1931年10月28日に大火が発生し、6軒の旅館が炎上し、19戸が全焼となった。大火後は、当時の石垣村当局が復興に尽力し、

表3 別府観海寺土地の株主構成(1920年)

地域	株主	持株数	1人当たり株数	持株の構成				
				～9株	10～99	100～299	300以上	
東北	山形市	1人	10株	10株				
関東	東京府	4	149	37	2	1	1	
	東京市	9	2,470	274		3	3	3
中部	福井市	1	20	20		1		
	名古屋市	1	2	2	1			
近畿	京都市	4	308	77	1	2	1	
	大阪府	7	4,685	669	1	4		2
	大阪市	58	10,628	183	2	28	20	8
	堺市	2	200	100			2	
	兵庫県	8	627	78	3	1	3	1
	神戸市	11	1,647	150	3	6		2
	和歌山市	1	40	40		1		
中国	松江市	1	5	5	1			
	岡山県	3	20	7	2	1		
	広島県	4	19	5	3	1		
	山口県	2	25	12	1	1		
	下関市	2	10	5	2			
四国	徳島市	1	1,000	1000				1
	香川県	7	232	33	2	4	1	
	松山市	5	600	120		4		1
九州	福岡県	10	1,110	111	5	4		2
	福岡市	4	150	38	2	1	1	
	若松市	1	3	3	1			
	久留米市	1	1,000	1000				1
	佐賀市	1	7	7	1			
	長崎市	1	200	200			1	
	佐世保市	1	5	5	1			
	熊本県	2	10	5	2			
	大分県	357	13,238	378	192	136	22	7
	大分市	199	5,555	28	89	96	12	2
鹿児島県	2	205	103	1		1		
海外	朝鮮	5	115	23	1	4		
	京城	2	70	35		1	1	
	大連市	5	126	25		5		
計	724	74,491	103	319	306	69	30	

(注) 別府観海寺土地(株)(1920)により作成。

幅1mの狭い石畳道を3mに拡幅する一方、三ヶ月地獄へ至る新道などを建設した²¹⁾。

こうした中、旅館の新規開業も見られた。杉乃井ホテルの前身である杉乃井館は、1938年に神戸の貿易商西村卯一郎が杉の木に囲まれた木造の料亭として開業したものである。その後、杉乃井館は陸海軍の指定旅館となつて、高級官僚や著名文士が利用して繁盛したが、1944年に北京で料亭を経営して財をなした福岡出身の石田清が買収した。

一方、森林の中に位置する別府荘園別荘地は、別府市街地から遠いこともあって販売に苦戦した。しかし、1931年に土地の無償供与で九州大学温泉治療学研究所（現在の九州大学病院別府先進医療センター）を誘致したこともあって、一気に知名度が上昇し、別荘地としての価値が向上した。その結果、中国の東北地方などで事業に成功した者などが別荘地として購入したのである²²⁾。

5 観光施設の開発と地獄めぐりの整備

(1) 観光施設の開発

別府温泉における明治後期から昭和初期にかけての数多くの観光施設は、その多くが外来資本による開発である。具体的には、1904年の躑躅園（太田長一）をはじめ、別府公園（別府町）、海地獄（千寿吉彦）、血の池地獄（松田麒麟）、山水園（小宮茂太郎）、竜巻地獄（伊藤初治）、鶴見園（松本勝太郎）、別府大仏（岡本栄三郎）、別府遊園地（木村久太郎）などである。しかし、現在営業を続けている施設は、海地獄・血の池地獄・竜巻地獄だけであり、別府遊園地はワンダーラクテンチとして大阪資本が経営をしているに過ぎない。

鶴見園は広島県呉出身の松本勝太郎（松本組・土木建設鉦山会社）が、1925年に開業した。彼は鉄道工事で来別し、土地約4.1万坪を買収したのである。1919年に本館工事に着手、以後小劇場・大劇場を完成させて本

格的な営業を開始した。兵庫県宝塚劇場を真似た少女歌劇が人気となった²³⁾。別府遊園地は、鳥取県境港出身の木村久太郎（日本の産金王。木村商事）が開発した。1903年に一帯の土地を買収して、金鉦の採掘を実施した。その後、温泉の枯渇を憂慮して鉦山の開発を中止し、遊園地開発へと方向転換した。1929年にケーブルカー、翌年に別府遊園地を開業した²⁴⁾。

イベント関係では、1928年に別府市制5周年を記念して中外産業博覧会が開催された。開催期間は4月1日から5月20日までの50日間であったが、期間中に81万8,996人が入場した。その内訳は、第1会場の別府公園に47万9,741人、第2会場の浜脇海岸埋立地に33万9,255人であった。第1次世界大戦後の不況から金融恐慌を経た不況期であったにもかかわらず、1日平均1万6,380人という盛会であった。市制5周年事業として、同年3月には別府市公会堂（1949年中央公民館と改称）、同年6月には浜脇高等温泉（浜脇東温泉・西温泉の合併）が完成した²⁵⁾。

さらに、別府市当局は1937年に国際温泉大博覧会を開催した。期間は3月25日から5月13日までの50日間で、別府公園が会場となった。このイベントは1935年に別府市・亀川町・朝日村・石垣村の大合併を記念したものであった。大合併を記念して、亀川町では浜田温泉共同浴場が新設された。

(2) 地獄めぐりの整備

別府を代表する観光施設としては地獄があり、各地獄を遊覧する地獄めぐりが開始された。田中・後藤（1942）²⁶⁾によると、1910年に海地獄が観光施設として整備され、2銭の入場料を徴収したことが始まりであった。その後、血の池・坊主・八幡・紺屋の各地獄が入場料を徴収するようになった。続いて、各地で地獄の開発が続いた。1937年までに鉄輪地獄・竜巻地獄・無間地獄・鶴見地獄・八幡地獄（再爆発）・鬼石地獄・白池地獄・

鬼山地獄・金龍地獄・竈地獄・雷園地獄などが開かれた。こうした地獄の開発が増加する中で、1940年に地獄組合が設立され、組織としての統一が行われた。

地獄をめぐる遊覧バスの初運行は、1917年に設立された九州自動車によってである。1928年に油屋熊八が設立した亀の井自動車は、日本初の少女バスガイドを乗車させて話題を集めることになった。その間、1921年12月に別府・山の手・鉄輪・柴石・亀川に至る県道地獄巡り循環道路が完成し、利便性を増した。

6 旅館業の発達

(1) 旅館業の推移

図2は、19世紀前半の1830(天保3)から1942(昭和17)年までの旅館数及び入浴客数(宿泊客数)について示したものである。旅館は旅人宿と木賃宿に分かれている。旅人宿とは旅籠のことで、木賃宿は湯治宿である。1877年に142軒だったものが、1917年には300軒を超え、1925年に454軒とピークを迎え、1942年に392軒を数えた。

大正末期から昭和にかけて、約400軒程度で推移しているが、1939年に旅人宿194軒、木賃宿193軒となって、はじめて旅人

宿が木賃宿を上回った。つまり、宿という施設面からは、1939年頃が湯治場から観光地へと転換した時期と推定できよう。

大分県は1919年に大分県宿屋営業取締規則(縣令31号)を公布した。この規則によれば、宿屋営業は旅人宿・下宿屋・木賃宿の3種類と定めている。施設設備の基準の他に、宿泊人名簿の記載を義務付けていた。それを受けた形で、同年に別府宿屋組合が結成された。

表4は1920年現在の別府温泉における旅館の分布について示したものである。全体では215軒の旅館が営業しており、内訳は旧別府村171軒、旧浜脇村44軒である。開業年は浜脇温泉の場合、明治20年代が14軒と多く、開業年は古い。明治40年代と大正期においては、浜脇という旧温泉集落から飛び出して、別府湾に面した住吉濱・向濱という海岸部で旅館の開業する傾向がみられる。屋号をみると、泉丈新館・泉丈別荘などがあり、こうした別荘的な旅館は当時の流行でもあった。

これに対して、別府温泉の場合、江戸時代に旅館が集中していた小倉街道筋の本町・南町には旅館は少ない。おそらく、流川下流域の繁栄によって廃業が続いたものと推定でき

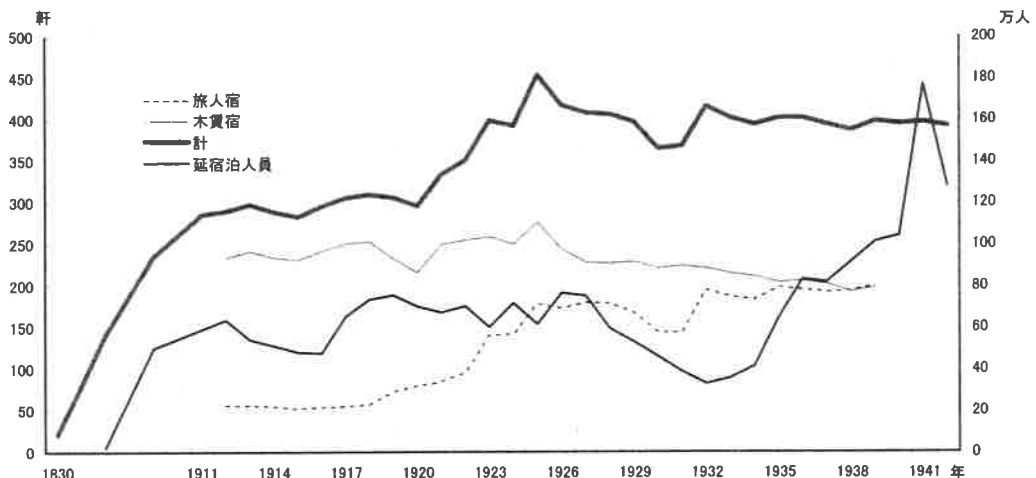


図2 別府温泉における旅館数と宿泊客数の推移(1830～1941年)

(注) 別府市役所所蔵文書などにより作成。

表4 別府温泉における旅館の開業期別地区別構成（1920年）

開業期 地区	立地	江戸期	明治 10年代	明治 20年代	明治 30年代	明治 40年代	大正期	計
旧別府村	野口原						1	1
	田ノ湯	共同湯			1	4	6	11
	不老町			1	2	6	6	15
	梅園町				1	3	13	17
	北濱	海岸		1	5	7	22	35
	港町			4	17	3	8	32
	楠濱				2	3	5	10
	柳町	共同湯		2	2	1	1	6
	楠町				1	1		2
	新稲荷町						1	1
	北町						2	7
	本町	旧街道		1	2			3
	仲町			1			1	2
	高砂町						1	1
	秋葉町						1	1
	南町上						1	1
	南町				1	2		4
永石通							3	3
小計		0	0	11	35	34	91	171
旧浜脇村	松原	旧市街				1	2	3
	中島					1	1	2
	住吉町						2	2
	住吉濱	海岸				1	3	4
	向濱						3	3
	浜脇	旧市街	1	0	14	12	3	0
小計		1	0	14	12	6	11	44
合計		1	0	25	47	40	102	215

(注) 岡野定治 (1920) により作成

る。北町は大正期に9軒開業しているが、これは1911年に開業した別府駅の影響である。旅館の増加地域は、流川下流から海岸部に位置する北濱・港町・楠濱・共同湯界隈の田ノ湯・不老町・梅園町などである。

(2) 旅館経営者の系譜

別府の初期の旅館経営者は、素封家や先住者によるものが多かったが、明治中期以降はそのほとんどが外来の農家出身者であり、いわゆる立身出世型が増えてきた。先住者では、1889年に網元鶴田兵吉（大分県佐伯出身）の次男萬吉が鶴萬旅館（港町）、1899年に萬屋呉服店（兵庫県但馬出身）が萬屋旅館（流川通り）を開業した。立身出世型では、1900

年に佐藤友吉（大分県臼杵出身）が松屋旅館（竹瓦温泉）、1911年に油屋熊八（愛媛県宇和島出身）が亀の井旅館（不老泉）を開業し、大資本では、1911年に大阪商船が別府ホテル（野口原）を開業した。終戦近くになると、海外からの引揚者による旅館経営も散見されるようになった。

立身出世型の旅館経営者の代表例は、現在の花菱ホテル（当時は花菱旅館）の初代経営者である兒玉定五郎である。彼は大分県北海部郡丹生村の豪農兒玉善四郎の長男として生まれ、別府では行商で財をなして1903年に米穀商と兒玉旅館（3階建。柳町）を開業したのである。さらに、1911年に兒玉旅館（流

川1丁目)を新築、1914年に第3別館・第4別館(愛媛屋旅館。これは完成と同時に親友の二宮為作に譲渡。いずれも北浜海岸)を開業し、経営を拡大した。さらに、1922年に鶴水園住宅地(海岸埋立地)の一等地で花菱旅館、1927年に第5兒玉支店福住旅館(竹瓦温泉)を開業した。その後、兒玉旅館は親戚筋に譲渡し、彼は花菱旅館の経営に専念することになった。兒玉旅館は1964年10月にやまなみハイウエイが完成したこともあって、1968年に海岸の旅館を売却して沿線に進出し、1968年に兒玉ホテルを新規開業したが、1986年に経営不振で倒産した。

7 観光客の実態

(1) 入湯客の推移と季節性

図3によると、別府温泉郷の入浴客数は1901年に50万人を数え、1939年に100万人を突破した。図4は市町村別の入浴客の推移を示したものである。1919年現在、別府温泉郷全体では100万1,486人を数える。その内訳は、別府市(別府・浜脇温泉)75万5,388人、亀川町(亀川・柴石温泉)3万3,120人、石垣村(堀田・観海寺温泉)3万8,385人、朝日村(鉄輪・明礬温泉)17万4,575人を示し、構成比は別府市で75%、朝日村で17%を示した。

大正末期における別府・鉄輪・明礬の3温泉の季節性をみると、別府は4～6月がオンシーズンであり、5月がピークとなる。一方、鉄輪と明礬は3～5月がオンシーズンで、4月がピークを示す。いずれも早春から春季に特に賑わいがあった。1939年の別府の延宿泊人員は101万1,339人を数える²⁷⁾。この数値は日本有数のもので、九州では熊本県山鹿の228万2,854人に次ぐものである。ちなみに、愛媛県の道後は159万7,899人であった。

宿泊客の季節性をみると、別府は3月～6月までがオンシーズンであり、7月から翌年1月までがオフシーズンとなっている。これ

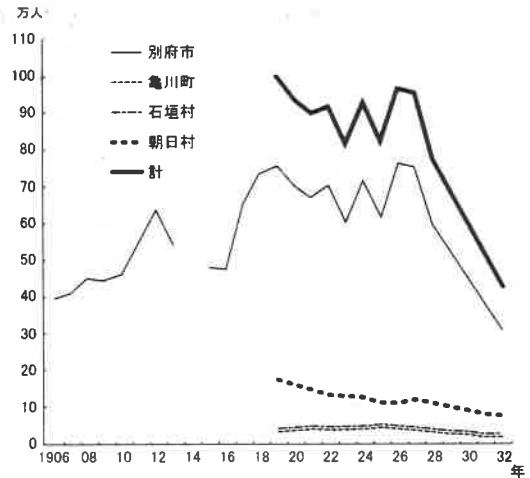


図3 別府温泉郷における入湯客数の推移 (1906～1932年)

(注) 大分県師範学校郷土室(1934)の資料により作成。

に対して、山鹿や道後は4月にピークを迎えるとはいえ、ほぼ通年化している。別府は古くから春先から梅雨までの農閑期が繁忙期といわれ、現在でも夏場がオフシーズンとなっている。

(2) 外国人観光客

第1次世界大戦後、日本は国策として観光事業に力を入れることになった。別府への外国人観光客の入り込みは比較的早い時期にみられた。外国船の別府港への入港は、1909年のオーストリア軍艦カイゼリン号が最初であった。その後、大正末期から日中戦争開始の年まで、毎年のように世界周遊の豪華客船が寄港した。来別した代表的な外国人には、ベープ・ルース、チャーリー・チャップリン、バーナード・ショー、ヘレン・ケラーなどがある²⁸⁾。1911年に大阪商船が開業した別府ホテルは、貴賓や外国人観光客に対応するためのものである。別府をこよなく愛した駐日フランス大使ポール・クローデルも、このホテルを利用した。1924年には、油屋熊八が亀の井ホテルを新規開業し、洋室を付帯することで外国人観光客の宿泊に対応した。

8 むすび

近世期までの別府温泉は、湯治場の段階に留まっていたが、明治期になって大きく変化した。1871年に近代的な別府港が築港されると、大分県当局は県費で共同湯を新・改築した。その後、海上交通や鉄道の整備もあって、共同浴場の周辺には新たに旅館・木賃宿や各種商店などが成立した。さらに、上総掘りによる温泉の人工掘削技術が導入されると、旧市街地の中で新規源泉掘削が進み、それに伴って旅館の内湯化が普及した。温泉開発に平行して、別府の温泉集落は小倉街道筋から流川下流域・共同湯周辺・海岸通りへと拡大したのである。一方、別府町当局は土地の区画整理事業を開始し、直交状の道路網を整備し、さらに旧市街地や山の手などに公園を造成し、観光地としての体裁を整えた。

大正期になると、大阪などの外来資本によって、海岸では埋立工事、郊外では別荘地の開発が進展し、また、観光施設が各地で開発された。開発主体は主に愛媛県・広島県・福岡県などの外来資本であり、大手資本とともに立身出世型の多くの人材が開発に携わったことも見逃せない。彼らによって、地獄めぐりの観光化、公園や遊園地などが開発された。旅館業については、当初は別府の素封家や先住者が経営に参入したが、その後、次第に外来の人物が増加し、油屋熊八のように別府の指導的立場になる者も登場した。

このように、別府温泉は近代において療養温泉地を克服して保養温泉地の機能を拡充し、さらに観光温泉地としての発展基盤を確立したことが判明した。こうした背景には、交通機関の近代化、そして温泉・土地・観光施設の開発などがあり、それらを演出した多種多様な人材の流入があった。彼らの別府温泉における温泉観光地域の形成に果たした役割は、極めて大きかったと言えるのである。

注・参考文献

- 1) 浦 達雄 (2005) : 「近代における別府温泉の形成過程」, 日本温泉地域学会第5回研究発表大会発表要旨集, 3～4頁。
- 2) 山村の温泉研究論文は多数あるが、代表的な文献を掲載する。
山村順次 (1998) : 『新版日本の温泉地 その発達・現状とあり方』 日本温泉協会, 234頁。
- 3) 加藤十次郎 (1908) : 『豊後温泉誌』 萩原定助, 127頁。
佐藤蔵太郎 (1909) : 『別府温泉誌』 高倉駒太, 145頁, 図46頁。
小侯愨 (1917) : 『大分県人名辞書』 小侯愨, 626頁。
岡野定治 (1920) : 『別府旅館能力調査表』 岡野定治, 1枚。
別府宿屋組合事務所 (1924) : 『豊後温泉地旅館名簿』 別府宿屋組合, 1冊。
神田外茂夫 (1934) : 『大阪商船株式会社五十年史』 大阪商船株式会社, 本文880頁, 附72頁。
別府旅館協会 (1936) : 「別府市旅館一覧表」, 同協会, 1冊。
大分県地方史研究会 (1957) : 『別府の歴史』 同研究会, 130頁。
是永 勉 (1966) : 『別府今昔』 大分合同新聞社, 511頁。
九州交通新聞社編 (1978) : 『大分県交通史』 同新聞社, 606頁。
佐藤蔵太郎 (1888) : 『別府温泉記』 荒金猪六, 28頁。
- 4) 山村順次 (1981) : 「温泉観光都市・別府温泉の地域変化」, 千葉大学教育学部紀要30巻1号, 129～155頁。
同 (1994) : 『別府市における共同温泉と温泉地整備に関する調査報告書』 別府市温泉課, 79頁。
浦 達雄 (1996) : 「別府温泉の観光診断」, 別府大学短期大学部紀要, 15号, 29～38頁。
同 (2002) : 「別府温泉における新しい観光の動向—別府八湯竹瓦倶楽部の活動を中心として—」, 総合観光研究, 1号, 155～162頁。
同 (2003) : 「別府温泉郷における街づくりの動向」, 温泉地域研究, 創刊号, 23～28頁。
同 (2004) : 「別府温泉における旅館業の成立」, 総合観光研究, 3号, 1～6頁。
同 (2004) : 「別府温泉郷における旅館経営の動向」, 大阪明浄大学観光研究論集, 3号, 1～12頁。
同 (2005) : 「別府温泉郷における観光客の動向」, 大阪明浄大学紀要, 5号, 13～25頁。

- 同 (2005) : 「別府温泉郷における旅館経営の変容」。温泉地域研究、4号、17～28頁、
- 同 (2005) : 「別府温泉郷における宿泊客の動向」。日本観光学会誌、46号、95～103頁。
- 同 (2005) : 「別府温泉郷における観光客の動向－高度経済成長期を中心として－」。大阪明浄大学観光&ツーリズム、5号、21～34頁。
- 中山昭則 (2003) : 「大正期における別府温泉の別荘地開発」。温泉地域研究、創刊号、17～22頁。
- 小堀貴亮・山村順次 (2004) : 「別府市鉄輪温泉における湯治場の地域変容」。温泉地域研究、2号、49～54頁。
- 5) 別府町 (1914) : 『別府町史』同町、196頁。
- 6) 前掲5)。
- 7) 前掲1)。
- 8) 大分県 (1885) : 『豊後国速見郡村誌』同県、2冊。
- 9) 佐藤蔵太郎 (1888) : 『別府温泉記』荒金猪六、28頁。
- 10) 内務省衛生局 (1886) : 『日本鉱泉誌下巻』報行社、396頁。
- 11) 松田繁 (1905) : 『別府濱脇町鉱泉ニ関スル取調書類』松田繁、1冊。
- 12) 内務省衛生局 (1923) : 『全国温泉鉱泉ニ関スル調査』同省、365頁。
- 13) 前掲5)。
- 14) 大分縣師範学校郷土室 (1934) : 『別府湾を中心とする郷土研究』宮崎書店、310頁。
- 15) 別府市 (1966) : 『別府温泉の実態』同市、53頁。
- 16) 当時の関係者から話を聞いた外山健一氏談による。
- 17) 是永 勉 (1966) : 『別府今昔』大分合同新聞社、511頁。
- 18) 石川真理子氏談による。
- 19) 矢島嗣久 (2004) : 「麻生太吉翁と川田十氏」。別府史談、14号、1～19頁。
- 20) 別府みらい信用金庫 (2002) : 「別府一近代の宅庫」。大分みらい信用金庫、112頁。
- 21) 別府市 (2003) : 『別府市誌』同市、電子版。
- 22) 春田光野氏談による。
- 23) 別府市 (1933) : 『別府市誌』同市、601頁。
- 24) 前掲23)。
- 25) 前掲21)。
- 26) 田中喜一・後藤佐吉 (1942) : 「別府の地獄遊覧事業に関する調査」。大分高等商業学校研究資料彙報、17巻11号、1～27頁。
- 27) 日本温泉協会 (1941) : 『日本温泉大鑑』博文館、1286頁。
- 28) 前掲21)。

別府温泉郷における地獄の観光開発と地獄組合

Tourism Development of “Jigoku(Hell Hot Spring)”and Jigoku Association in Beppu Spas

中山 昭 則*
Akinori NAKAYAMA

キーワード：観光開発 (tourism development) ・ 地獄 (jigoku: hell hot spring)

地獄組合 (jigoku association) ・ 別府温泉郷 (Beppu spas)

1 はじめに

別府温泉郷では、1888 (明治 21) 年に突湯と呼ばれる上総掘りの井戸掘削技術が導入され、それまで自然湧出に依存していた源泉を人工的に確保することが可能になった。その結果、内湯を設ける旅館が一挙に増えて 1902 年には 140 軒を数え、旅館数は 1911 年に 286 軒へと急増したが、その経営者は大分県内や豊後水道対岸の愛媛県や九州各地からの外来者が多かった¹⁾。

源泉掘削は個人的に行われたものが圧倒的に多く、その中には地獄と呼ばれる噴気泉の掘削も行われた。1911 年の人工掘削による源泉所有孔数は 559 孔にのぼった²⁾。人工掘削による孔数は、その後 1954 (昭和 29) 年までのおよそ 40 年間では 100 孔程度しか増加していないことから、当時の乱開発ぶりは際立っている。

地獄が観光施設として開設されたのは、1910 年に海地獄を覗き見していた湯治客に対して管理人が 5 銭を徴収し、地獄を拝観させた時点からであるという³⁾。自然噴出していた地獄は、突湯による温泉開発ブームと同時期に観光施設として営業を始めたことになる。当時の関係者は「1日に3円も水揚があるとホクホクだった」と回顧していることから、1日に50～60人程度の拝観者があったものと推測できる。

市内に点在する地獄もこれに続き、自然噴出していた地獄の多くは料金を徴収するようになり、地獄は観光施設として存立することになった。しかし、地獄が本格的に観光開発されるのは、やはり突湯以降の開発ブームからで、人工掘削によって小さな噴気孔が掘られ、各地に地獄が誕生した。

1920 (大正 9) 年、皇太子 (昭和天皇) が海・坊主・血の海の各地獄を巡幸したことから地獄地帯の名は全国的に知れ渡るようになり、客馬車や人力車による地獄遊覧は別府観光の大きな柱となった⁴⁾。さらに、バスによる地獄遊覧が始まると、地獄は別府温泉郷を代表する観光資源として揺るぎない地位を確立した。

このように、地獄が全国的規模の観光資源として形成されるとともに、その所有者たちは地獄組合を設立し、組織的に観光事業に乗り出した。たしかに、地獄は別府温泉郷の観光開発史上最も貢献した観光資源といっても過言ではない。しかし、その影には半ば強制的に噴気孔を開発し、所有者たちが組織的に観光開発を行ったという事実がある。

地獄に関しては、別府市全体の観光発達史の視点からは論じられているものの、地獄そのものの所有形態や開発形態に関するものは少ない。そこで、本研究は先ず地獄組合の設立過程を明らかにし、その背景を検討する。

* 別府大学文学部 (Beppu University)

次いで、地獄の観光資源化の実態を明らかにして、観光資源としての特性を考察することにしたい。主な資料として、別府市当局(1933)・加藤(1985)・田中(1942)などの文献を参考とした。

2 地獄組合設立の経緯とその要因

(1) 設立の経緯

明治中期以降、地獄が温泉資源として認識されるとともに、地獄はその存在感を示すために趣向を凝らした施設整備を進めた。そして、各地獄は湯治客や観光客の誘客にしのぎを削っていた。一方、別府市内にはバスやタクシー会社が乱立していて過当競争状態にあり、これらの旅客輸送会社は観光施設や旅館と提携して旅客の確保に努めていた。

このように、観光客の確保に躍起となっていた両者はお互いに結びつきを強め、特定の地獄と旅客会社が観光客を融通し合う状況が生まれた。その結果、観光客からは激しい誘客活動によって、目当ての地獄ではない所に連れて行かれたとの厳しい批判が相次いだ。その上、地獄ごとに料金が徴収されるので、相当の負担を強いられることに対する不満も強まった。

こうした事態に対して、別府市および警察当局は、組合を結成して料金の統一化と共通券の発行を各地獄経営者に強く勧めた。これを受けて、各地獄は1933(昭和8)年以降組合結成に向けた協議を3回行ったが、統一料金の金額設定と共通券による収入の配分率を巡って対立し、合意には至らなかった⁶⁾。この背景には、当時の地獄が行政的に別府市・亀川町・鉄輪村・石垣村に分散していたため、行政間の諸手続きの調整が不十分であったことが指摘される。

しかし、1935年以降、地獄を取り巻く状況は大きく変わることになった。まず、同年亀川町・鉄輪村・石垣村が別府市と合併し、地獄に関わる行政制度は一元化された。この頃から企業の統制が全国規模で進められ、独

立事業体であった地獄の間にも経営の統合に向けた機運が高まっていった。企業統制は交通機関にも及び、大分県の指導によって市内に乱立していた旅客会社は亀の井バスと別府合同タクシーに一本化された⁶⁾。

交通機関の統制は、地獄にとってみれば旅客会社と個別に連携する機会を失うことになったばかりか、入場客の出足は統制されたバス会社次第という立場に置かれることになったのである。以上のことから、各地獄は1938年に意見調整をして別府地獄遊覧組合を設立し、同年4月1日より共通券の販売を始めた。

組合設立当時、入場料を徴収して公開していた地獄のうち、海・血の池・鶴見・本坊主・八幡・鬼山・新坊主・白池・竈・龍巻・鉄輪の11地獄が組合に加入し、別府市営の十萬地獄ならびに療養施設として特化しつつあった雷園地獄は加入しなかった。

組合設立に向けた一連の動きを見る限り、組合設立は戦時体制に向けた企業統制という全国的な動きに迎合したことは間違いない。しかし、組合設立の直接的な要因となったのは地獄遊覧バスの統制であり、このことは組合協定の「共通券は組合に於いて発行してバス会社取り扱はしめ、…」との記述があるように、共通券の販売をいわば亀の井バスに丸投げする形で観光客の足を確保し、共存を図ることを最大の目的としていたと思われる。さらに、団体券の扱いについても「バス会社に於いて発行の上組合に報告せしめ、…」と記載されている。当時は遠隔地からのバス旅行は考えにくいので、団体券も事実上亀の井バスの独占を許していたものといえる。このように、組合設立はもはや自立的に誘客する手立て失った各地獄の防衛策としての意味合いが強かったのである。

(2) 地獄遊覧の統制

ここでは、組合設立の直接的な要因となった地獄遊覧バスの統制過程について検討する。

地獄遊覧に始めて自動車が参入したのは、1917（大正6）年に九州自動車が高ハイヤーの運行を始めたことにある。しかし、行程距離は30kmにおよび、その上道路事情も悪かったので半日を要したと記録されている⁷⁾。1921年には皇太子の地獄巡幸によって急遽別府市内の道路は整備され、鉄輪温泉と堀田温泉を結ぶ地獄循環道路と別府亀川間の海岸

通が開通した。この開通によって、地獄めぐりの行程距離は21km、所要時間は2時間30分程度と大幅に短縮されたのである（図1）。

タクシー事業は1920年に京都自動車が引き継ぎ、循環道路を利用して6人乗りの乗り合いタクシーを1日2回運行していた。料金は当時の主力輸送手段であった客馬車の貸し切り料金と同額の1人2円50銭であった。



- ①血の池地獄 ②龍巻地獄 ③坊主地獄 ④鬼石坊主地獄 ⑤海地獄
- ⑥鬼山地獄 ⑦竈地獄 ⑧白池地獄 ⑨鉄輪地獄 ⑩鶴見無間地獄
- ⑪八幡地獄 ————：地獄めぐり循環道路

図1 昭和初期における地獄の分布と地獄めぐりコース(1927年)

(注) 陸地測量部5万分の1地形図(1927年)により作成。

これは、同一料金を設定することによって無用な軋轢を避けようとしたためと考えられるが、利便性と快適性の両面において客馬車に対して優位性を保てなかったこともあろう。このタクシー参入によって、観光客の獲得争いが繰り広げられた。しかし、全般的には旅客輸送能力は低く、1928年に開催される中外産業博覧会を控え、地獄遊覧の旅客輸送能力の改善が急務の課題となった。

1927年、亀の井ホテルは中外産業博覧会をにらんで地獄遊覧バス事業の認可を取得し、翌年から25人乗りバス4台を配備して地獄遊覧の運行を始めた。バスには女性車掌が乗務して名勝を案内した。女性車掌の七五三調の名勝案内は人気を博し、それ自体が別府の新たな名物となった。運行は午前7時30分発を始発として以降25分毎に出発させ、料金は1人1周1円で途中乗り降り自由という破格のものであった。この中外産業博覧会は、4月から5月にかけての50日間の会期中に、延80万人の入場者を数えるほどの大盛況を呈した。会期中に地獄遊覧を楽しんだ観光客は、相当数にのぼったことが推測できる。

1932年には、大橋自動車商会が17人乗りバス6台を配備して地獄遊覧に参入してきた。やはり女性車掌を乗務させて亀の井バス同様のサービスを展開し、料金も1周1円と同額として観光客の争奪戦を展開した。この低料金に対して、客馬車およびタクシー各社が猛反発し、一時はバス会社前やバス停留所で座り込みなどの抗議手段に出たが、結局タクシー各社は6人乗り1台3円という値下げで対抗した。1937年には別府国際温泉大博覧会の開催が決定され、これに合わせて1934年には泉都自動車が地獄遊覧に新規参入し、観光客の争奪戦はさらに激しさを増した。

この頃は全国的に会社統制が展開されていたので、別府市などが仲介に入ってバス会社の経営合同化への模索が始まり、1935年に

3社共同経営の協定が結ばれた。この協定によると、①料金は一律1円とする、②車両の運行、待合室の設置などは個別に行う、③運賃収入は亀の井バス50%、大橋自動車35%、泉都自動車15%とするといった3点が合意された。

経営の共同化は会社統制に向けた動きを加速させ、1937年に亀の井バスは大橋自動車商会を9万円で買収し、さらに泉都自動車の株を取得して50万円に増資した。これに追いつけなかったのがガソリン統制であった。これで旅客自動車産業全体の整理統合は避けられない事態となった。まず、1938年に亀の井・泉都・別府の各タクシー会社が主体となって資本金46万円の別府合同タクシーが設立され、全市120台のタクシー全てがその配下に入った。翌年には、県によって市内のバス単一化が勸奨されたが、この頃の別府は紀元二千六百年節の日向聖地(美々津)参拝の帰路に立ち寄る観光客が多く、各社の思惑の違いから統合化は進まなかった。しかし、鉄道省から遊覧バス廃止令が出されると、地獄遊覧バスは定期路線を組み込むことによって存続を図ることになり、統合化は避けられない事態となった。そして、1941年には泉都自動車は亀の井バスに合併され、地獄遊覧バスは亀の井バスに一本化された。

(3) 地獄組合加入地獄の開発経緯

地獄の観光資源性が認識されると、その開発が一層盛んになった。組合加入の地獄をみると、1922(大正11)年の鉄輪地獄から1936(昭和11)年の竈地獄までの14年間に、加入11地獄のうち8地獄が新規開発されている(表1)。

このような地獄開発は、当然のことながら温泉資源枯渇への懸念も生じるようになった。事実、近接しすぎる掘削のために噴気が衰えた例もあり、これ以上の掘削許可はすべきではないとの指摘も出された。

源泉掘削の規制については、明治末に大分県によって「三十間四方の掘削禁止」の規制

表1 人工掘削で開発された地獄組合加入地獄（1922～1936年）

年次	地獄名	面積	噴気数	開発状況
1922（大正11）	鉄輪	50坪	2孔	温度99℃、弱食塩泉、噴気孔と間欠泉
23	龍巻	25	1	温度100℃、塩類泉、間欠泉30分毎に1分間噴出
24	鶴見無間	30	1	無間地獄、温度67℃、単純泉、碧緑色
25	鶴見無間	40	1	鶴見地獄、温度67℃、単純泉、碧緑色
28（昭和3）	八幡	80	4	温度91℃、ラジウム・硫黄・炭酸含む
30	新坊主	40	1	温度99℃、鉛色熱泥池、カリウム・ナトリウム・カルシウム
31	白池	70	1	温度95℃、カルシウム・ラジウム、白色系コバルト色
32	鬼山	120	3	中性塩類泉、噴出力衰微
36	竈	100	4	温度98℃、塩類泉

（注）田中喜一・後藤佐吉（1942）により作成。

が出され、さらに別府市も「四十間以内の温泉掘削と百間以内の噴気孔掘削禁止」の規制を出した⁸⁾。しかし、地獄開発申請の多くは既存の噴気孔の浚渫という名目で出されていたために許可せざるを得なかった。これに対して、大分県は1925（大正14）年に鉱泉噴気孔掘削浚渫許可標準内規を交付し、新規掘削は「既存泉との距離が四十間以上、既存泉を浚渫する場合は既存泉との距離が二十間以上、噴気泉の新規掘削は既存湧出泉との距離を、公衆浴場として利用する場合は三百間以上、自家浴場とする場合は百間以上」といった規制を実施した。

その結果、泉源の保護対策に組合を挙げて取り組んだという記録は未見である。それは、組合加入地獄の多くが乱開発の当事者であるので、当然のことなのかもしれない。組合設立メンバーであった地獄の中には、現在はその形跡も無くなっているものも存在する。行政当局による泉源掘削の規制は、組合設立よりも30年も前から実施されていたことを鑑みた場合、こうした規制をかいくぐって乱開発を行ったという事実は、重く認識すべきではなかろうか。

（4）組合組織の実態

ここでは、地獄組合がどのような組織であったのかを検討することにする。まず、組

合の設立の目的は、「組合員相互の親睦を計り相協力して遊覧施設の改善並びに遊覧地帯の発展に期することにある（第三条）」と記されている。また、役員については「組合長、副組合長、理事各一名を置き、任期を一年とするが再任は妨げない（第八条）」となっている。

具体的事業については、「地獄遊覧を目的とする交通業者と連携し、観覧料を統一したる共通券を発行し、遊覧客の便宜に資するもの（第四条）」とある。さらに、「経費中に於いては宣伝費として観覧料の割以内を関係交通事業即ちバス及びタクシーに交付するものとし…（第六条）」とも記されている。このような記述をみると、組合側は交通機関に宣伝費を補助することによって共存共栄を図ろうとしていたと考えられる。しかし、共通券の販売はバス会社が一括販売していたので、観光客の動向は実質的にはバス会社によって握られていたといえる。規約には宣伝費の補助という名目で記されているが、両者の力関係からみて宣伝費を実質的に肩代わりしていたのではないだろうか。

また、各地獄経営者は共同事業の他に一事業は独自に展開できるが、協定には場内での料金を徴収する施設の設置を禁止し、土産物などの価格も統一することを申し合わせてい

る。このような協定は当時の会社統制化に対処するために、価格統一を徹底することによって1事業体としての体裁を整えたのではなかろうか。しかし、八幡地獄などは「怪物館」を設置して別途料金を徴収しているとの記録もあり、この申し合わせの実効性についてはなお検討の余地がある。

共通券収入に関しては、各地獄は毎月10日・20日・30日の3回計算して組合に納入することになっている。その後、一定の配当率により各地獄に配分されていた。1940年の決算をみると、総収入は122,167円6銭で、その内84.8%に相当する103,597円87銭が配当金で占められている。宣伝費名目では、6,561円が交通機関に配分されていた。組合事務所は当初亀の井バス営業所内に置かれていたが、1940年春からは別府商工会議所に移転している。

地獄の所有者についてみると、加入11地獄のうち別府市内在住者は約半数の6地獄にとどまっていた(表2)。

江戸時代以前から存在していた血の池地獄は、当時佐賀銀行頭取であった松田麒造が所

有していた。海地獄の所有者千寿豊彦は旧岡藩士出身の鉄道技師であり、松田に勧められて地獄を買収した⁹⁾。多くの地獄は数々の転売を経てきたが、地獄所有者は別府市内在住者であっても管理を委託していたようである。管理者は場内管理のかたわら、売店を経営していた。

地獄の個人所有については、自然現象物を私有化して料金を徴収することに疑問を抱く声は既に上がっていた。私有化に疑問を抱く側からは、「料金徴収反対者を納得させるために俗化した施設を作り、周囲の調和を無視するものだ」といった厳しい意見もみられる。これに対して、「別府の地獄は既に人工物であり、経営者も相当の投資をして観光施設を整備しているのだから料金徴収もやむなし」との反論も出た¹⁰⁾。

こうした議論の背景には、地獄は近世から「厄介者扱い」され、地獄は村落の共有地になるどころか所有者が転々としていたという経緯がある。また、地獄の私有化は上総掘りの導入によって個人的に温泉掘削を行う事例が急増したことも要因であり、こうした土壌

表2 地獄組合加入地獄の所有者(1942年)

地獄名	所有者	居住地		管理者
		別府市内	その他	
血の池	松田麒造・克己		佐賀県	中村清一 売店経営
龍巻	伊藤初治	別府市		
海	千寿豊彦		東京都	古賀真澄 新別府に引湯
坊主	甲斐大蔵	別府市		田尻 秀 売店経営
鉄輪	佐原秀次郎	別府市		
白池	井上知造他2名	別府市		武内真一
鬼山	宇都宮則綱	別府市		安波徳一 売店経営
竈	宇都宮勇	別府市		
鬼石坊主	木戸正三		小倉市	伊藤善三郎 売店経営
鶴見無間	松本勝太郎		呉市	井上知造
八幡	中野次郎		飯塚市	久保田孝 売店経営

(注) 田中・後藤(1942)により作成。

が地獄の個人所有を形成してきたものと考えられる。

3 地獄の観光開発

(1) 観光施設整備

地獄組合が設立されたとはいえ、各地獄の経営はその所有者に委ねられていた。次に、地獄の施設整備の実態を検討する。

まず、観光客に公開していた敷地面積は、海地獄の 3,000 坪から龍巻地獄の 100 坪までその幅は大きかった。地獄場内には、土産物店が設置されていた（表 3）。

土産品のうち、当時すでにその名が知られていた竹細工と別府絞りは大半の売店で売られていた。竹細工は明治初期から湯治客の土産として作られ、1932 年の生産額は 90 万円にのぼり、その内 10 万円分は神戸経由で輸出されていた別府を代表する工芸品であり、別府絞りは 1889 年頃血の池地獄で創作されて広まり、昭和初期にはすでに 150 万円の売り上げを記録していた¹¹⁾。

これら土産品は個々の記録は残されていないが、地獄の売店における販売は別府温泉郷の知名度上昇と売り上げ増収に大きく貢献し

たことであろう。その他、泉質の効能を売り物にした軟膏や胃腸薬なども各地獄のオリジナル品として売られている。このように、各地獄ともに多種多様な土産物を揃え、店先を賑わせていた。

その一方、園内の環境整備は地獄間で大きな差異がみられた¹²⁾。広大な敷地を擁していた海地獄は、「自然美豊かな一大遊園地」と呼ばれていた。血の池地獄も海地獄には及ばないものの、茅葺家屋や生垣を用いた庭園を整備していた。これに対して、鬼山地獄は世界初となる温泉利用のワニ養殖に成功し、大ワニ 10 匹、子ワニ 12 匹を公開して人気を呼んでいた。竈地獄は仏教の地獄界に因んで「一丁目閻魔の茶の湯」「二丁目七変化坊主」「三丁目釜地獄」「四丁目極楽」と銘打って、それぞれに解説をつけた遊歩道を整備した。八幡地獄では別途料金を徴収して、「怪物館」なる施設を設置していたとの記録が残されている。組合規定通りならば、敷地内には別料金施設の設置は認められていないので、隣接地に設置したものと考えられる。この施設の内実は不明であるが、八幡地獄は熱泥が大音響とともに飛び散る様子が驚きとともに記され

表 3 地獄の施設 (1941 年)

地獄名	場内面積	店舗面積	土産品	その他の施設
血の池	1,000 坪	30 坪	血の池膏・血の池染・竹細工	庭園風園地（草葺家屋・生垣）
龍巻	100	簡易施設	記載なし	間欠泉 30 分ごと 1 分間噴出
海	3,000	40	地獄絞り・竹細工・湯の花	自然庭園と遊歩道
坊主	不明	60	坊主饅頭・地獄染・湯の花	地獄の泥を陸軍病院へ
鉄輪	120		湯の素・西瓜糖・湯の花	貸間業
白池	500	10	白池膏・白池胃腸薬	隣地に入浴施設と旅館
鬼山	300	10	鱧皮細工・擬皮製品	温泉利用の鱧養殖（世界初）
竈	不明	30	湯の花・胃腸薬・カマドパン	地獄にちなんだ遊歩道
鬼石坊主	500	30	坊主膏・湯の花・竹細工	不明
鶴見無間	550	30	地獄焼人形・別府絞り・湯の花	湯の花採取と製造施設を公開
八幡	500	30	八幡地獄膏・寿命膏・鎮痛液	怪物館設置（別途料金）

(注) 田中・後藤(1942)・『別府市誌』(1933) により作成。

ていることから、この状況をイメージして作られたものであろう。また、鶴見無間地獄は湯の花採取・加工施設を整備し、公開していた。

他方、海地獄は外来者が開発した新別府別荘地に温泉を供給する泉源として買収されたものであった。坊主地獄は遊園地を整備する一方で、泥を治療用に陸軍病院に納入していた。さらに、白池地獄は治療用の入浴施設を整備し、主に皮膚病患者に人気があった。

(2) 地獄遊覧バスの輸送力と地獄入場者

当時の地獄遊覧へのアクセスは実質的にはバス輸送に委ねられ、地獄観光はバス輸送力に左右されていた。そこで、当時のバスの輸送能力から組合設立当時の地獄遊覧の状況について検討してみたい。

当時の地獄遊覧バスの運行状況から、1日の輸送力を割り出してみる。バスの運行ダイヤは夏季には7時50分から17時まで30分毎に運行されていたので、1日あたり19本の運行となる。亀の井バスが所有していた25人乗りバス1台体制で運行していたとすれば、1日の輸送能力は475人となる。冬季は8時から16時までの運行であったから、同様に1日17本の運行で、輸送能力は425人となる。

さて、1939年から3年間の月別入場者数から1日当たりの入場者数を算出すると、各

年ともに7月と12月を除いた10ヵ月間は、バス輸送能力を上回る観光客が入場している。とりわけ、1月と4月は輸送能力の2倍以上となる。

混雑時には5分毎に臨時便が出ていたとの記録もあるが、整備点検や運転手・車掌の手配を考えると、5分間隔での運行はそれこそ例外的な対応であったものと考えられる。あるいは2台体制での運行をこのように記録している可能性も高い。2台体制における輸送能力を算出してみると、当時の状況から亀の井バス所有の25人乗りバスと旧大橋自動車所有の17人乗りバスを運用した定員42人体制で運行していたことになり、1日19もしくは17本運行に対応できる。この場合、夏季運行時における1日の輸送能力は798人、冬季では714人となる。

地獄の入場者は季節的な偏向が伺える(図2)。実際にはシーズンによりさらには日によって臨機応変な運行を試みていたものと考えられる。何れの運行体制にせよ、連日バスの座席はほぼ満席であったと考えられる。

共通券を利用して地獄遊覧を楽しんだ人々は、1939年が16万3,207人で、これは同年の別府市内宿泊者総数101万1,339人の16.1%であった。翌1940年は「紀元二千六百年節」の年に当たり、観光客は増加している。この要因は、前述したとおり日向

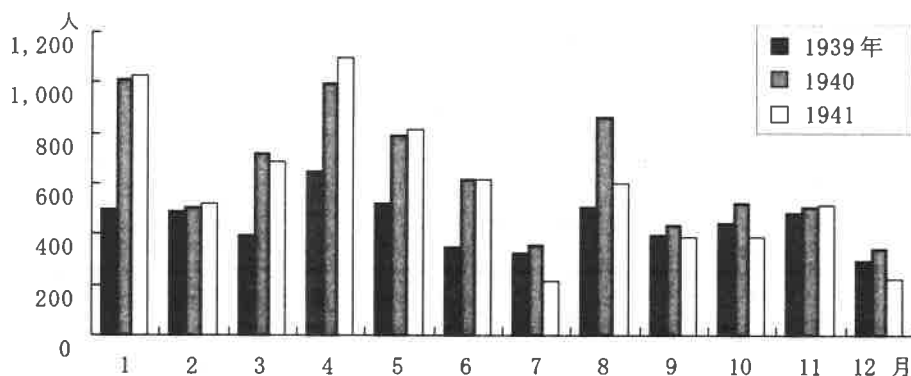


図2 地獄の月別1日平均入場者数の変化(1939～1941年)

(注) 田中・後藤(1942)・『別府市誌』(1933)により作成。

聖地（美々津）詣での帰路に立ち寄った観光客が多かったことにも関係していると考えられる。同年の入場者数は23万4,123人で、前年比144%増加であった。市内宿泊者総数に占める割合は16.3%で前年と同じ水準にあった。1941年になると戦時色も一段と濃くなり、観光旅行そのものが困難な状況になっていたとはいえ、地獄への入場者数は21万8,442人と前年の93%の水準を維持していた。しかし、市内宿泊者総数に占める割合は12.3%と低下している。このことは、恐らくは別府港に寄港した軍関係者が多数訪れたことを反映したものであろう。

4 むすび

以上、別府温泉郷における地獄の観光開発と地獄組合について、1938（昭和13）年の組合設立との関係から検討してきた。その結果、以下の諸点が明らかになった。

①地獄組合の設立は、各地獄の自主的な動きというよりも、交通統制による交通アクセスの一本化という外的要因によるところが大きい。

②地獄組合設立の内実は、共通券の販売を統制によって一元化されたバス会社に委託する形で入場客を確保し、各地獄の共存を図ることを最大の目的としていたと考えられる。

③地獄の施設運営は個々の地獄に任されており、その結果、趣向を凝らした施設が整備され、その多くはその後の別府観光に大きな影響を与えるとともに、俗化した観光施設ともなっていくた。

④その一方、地獄組合設立の要因ともなった共通券は今日も存在し、毎月3回の集計といった方法まで設立当初から変わっていない。また、その収益から宣伝費・運営費・人件費が捻出され、宣伝活動も組合が一括している点も同じである。このように、収益の流れとその配分の図式は、設立当初の方式を今日もそのまま継続している。

⑤源泉の維持・確保に関する対策は、設立当

初から組合では実施していない。現在でも、この問題は各地獄任せの状態で、今日まで有効な対策を講じてこなかったことが浮き彫りになった。

当然のことながら、この67年の間で観光客の動向は大きく変わり、今日でも運行している亀の井バスによる地獄めぐり遊覧バスの地位は著しく低下し、マイカー利用の個人観光客が圧倒的に多い。つまり、観光客の誘客は組合設立当時のように亀の井バスとの連携では多くは望めない状況にありながら、組合の組織はほとんど変化していないのである。国内旅行とりわけ団体旅行の不振が言われて久しいが、この低落状況に対して原因を追究すべきであらう。

源泉の維持についても、海地獄や龍巻地獄などでは背後の山林を買収して、いわゆる涵養林を育成して源泉の維持に努めているが、鶴見地獄と八幡地獄は今から40年ほど前に消滅した。今後は、組合をあげて源泉維持を打ち出し、環境に配慮していることをアピールする必要性に迫られている。

今後の研究課題としては、今回言及できなかった①各地獄の所有者が組合設立にどのように関わったのか、②源泉維持に対する各地獄の当時の認識と対策について究明する予定である。

注・参考文献

- 1) 山村順次（1998）：『新版日本の温泉地—その発達・現状とあり方』日本温泉協会、239頁。
- 2) 別府市（1933）：『別府市誌』同市、474～475頁。
- 3) 加藤柔郎（1985）：「地獄めぐりへの発展」『別府市誌』同市、256～258頁。
- 4) この時、皇太子は中津平野を中心とした陸軍特別大演習の統監として参加されていた。
- 5) 田中喜一・後藤佐吉（1942）：「別府の地獄遊覧事業に関する調査」。大分高等商業学校研究資料集報、17巻1号、25頁。
- 6) 前掲5)。
- 7) 吉田豊治（2003）：「地獄めぐり」『別府市誌第1巻』同市、236～243頁。
- 8) 大分県温泉調査会（1999）：『大分県温泉調査

- 会 50年のあゆみ』同調査会、60頁。
- 9) 大分みらい信用金庫(2002):『別府一温泉読
本』同金庫、ふるさとの遺産シリーズ①、
75頁。
- 10) 前掲5)。
11) 前掲2)。
12) 前掲5)。

国民保養温泉地・四万温泉の地域変容

Regional Change of Shima Spa as a National Health Spa

小堀 貴亮* 山村 順次**
Takaaki KOBORI Junji YAMAMURA

キーワード：温泉地 (spa)・国民保養温泉地 (national health spa)
地域変容 (regional change)・四万温泉 (Shima spa)

1 はじめに

環境省指定の国民保養温泉地は、2005年現在 91 地区、169 ヶ所の温泉地を数える。その大半の温泉地は保養目的の利用者に支持されており、温泉地本来のあり方に合致しているものの、その存在は国民一般に広く知られているとは言えない。しかし、高齢化社会への傾斜が著しい今日、指定の有無にかかわらず、国民の保養や健康づくりへの温泉志向は強い。

群馬県中之条町四万温泉は、1954（昭和29）年に、青森県酸ヶ湯温泉・栃木県日光湯元温泉とともに、国民保養温泉地第1号に指定された温泉地である。事実、高度経済成長期末の1970年代前半までは、旅館が御飯と味噌汁を出す半自炊形態を利用する滞在型湯治客が著しく多く、その数は延28万人を数え、賄付き1泊型観光客数の21万人を上回っていた。しかし、1980年代後半には観光化が急速に進み、半自炊形態の旅館は現在1軒のみとなった。このような20年前までの四万温泉の湯治形態の変化については、すでに山村(1990)¹⁾が報告した。ここでは、その後の温泉地と温泉客の変化を加えて、温泉地の発展過程を明らかにし、さらに国民保養温泉地としての四万温泉のあり方を提示したい。

2 四万温泉の地域特性と変化

(1) 立地・歴史

四万温泉は、四万川の溪谷に沿う閑静な環境のもとにあり、温泉地への入り口から温泉口・山口・新湯・ゆずりは・日向見の5つの小温泉集落が連続して立地している(図1)。

四万温泉は、延暦年間(782～806年)に征夷大將軍の坂上田村麻呂が人浴したのが始まりと言う。また、歴史的に四万温泉が湯治場として開発されたのは、戦国時代の1563(永禄6)年、岩櫃城主に仕えた田村家が山口において湯治宿を開いたのが始まりであると言われる²⁾。後に、その分家が寛永年間(1624～1644年)に新湯(荒湯)に進出し、さらに1694(元禄7)年には関家(積善館)が湯小屋を建て、この田村家と関家が四万温泉の指導的役割を果たしてきた。その際、四万川の川床にある惣村所有の湯場(共同浴場)の温泉維持経費負担が条件とされた³⁾。

そして、湯治場として旅行者が集まり、温泉街として発展したのは、元禄文化が花開き始める江戸時代前期である。1683(天和3)年の「湯銭取り立て帳」によれば、現在の群馬県各地のみならず、遠く江戸からの湯治客も多くなり⁴⁾、江戸時代の前期から中期にかけて、四万温泉は急速に湯治場として発展した。1755(宝暦5)年には、山口と新湯を合わせて700人ほどの収容力を有し、湯治客

* 日本温泉協会 (Spa Association) ** 千葉大学教育学部 (Chiba University)

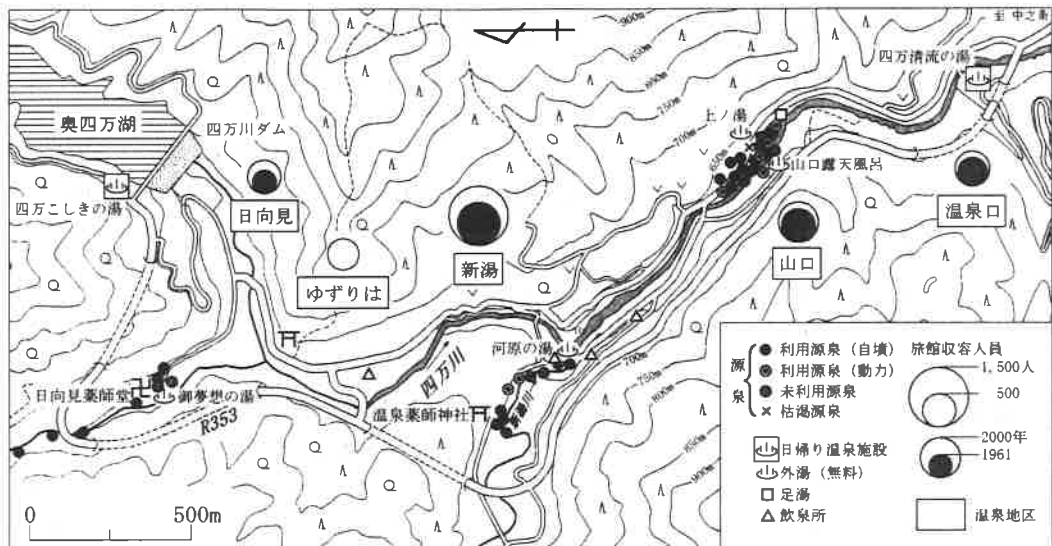


図1 四万温泉の集落構成 (2004年)

(注) 四万温泉協会の資料により作成。

数は2,000人を超えるに至ったのである⁵⁾。

年間延宿泊客数は明治前期には約4万人(1888年)であり、群馬県内の養蚕農家の湯治客が多かったが、大正から昭和初期になると約12万人(1921年)へと増え、夏には東京の下町の商人層、初夏には北関東の伊勢崎・桐生・足利・秩父などの機業地帯からの商工業者など、都市からの湯治客が来湯して平均10日間も滞在し、東京の客が半数を占めるほどになった⁶⁾。ここに、四万温泉は都市住民の保養の場としての性格を確立したのである。

第2次世界大戦後、1955年の延宿泊客は25万人を数え、戦前のピークであった1940年の水準に達した。しかし、保養温泉地の性格を反映して歓楽施設はなく、宿泊形態も長期滞在の人湯客に合わせて半自炊形態を維持していた。そして、高度経済成長期に国民の観光形態が大きく変化する中で、一気に半自炊形態が消滅することになった⁷⁾。

(2) 温泉資源と温泉利用

四万の温泉は、質量ともに優れている。2002年現在、源泉は図1に見られるように、日向見10(うち枯湯1)、新湯11、山口22(う

ち枯湯1)の計43カ所あり、その約90%が自然湧出である。平均60℃の高温のナトリウム・カルシウム-塩化物・硫酸塩泉が毎分3,400リットル湧出しており、高度経済成長期の1969年には、毎分1,717リットルであったので、温泉湧出量は2倍に増えた。

1969年の旅館数は46軒、宿泊収容定員は2,500人であり、2002年ではそれぞれ41軒、3,258人となり、旅館数の減少と収容定員の大幅な増加が明らかである。ここで、温泉資源指数(収容定員1人当たり温泉湧出量)(山村2005)⁸⁾の変化を算出すると、0.7から1.0へと高まっている。四万温泉の総浴槽数は164であり、そのうち「源泉かけ流し」が62%を占め、「源泉かけ流し・循環併用」が38%で、「循環のみ」はない。そして、新湯と山口地区の各2軒、温泉口の1軒の有力な5軒が61浴槽を有し、37%を占めている。特に、新湯地区の田村旅館は本館と別館に計20ものユニークな浴槽を持ち、1旅館内で湯めぐりを楽しめるので多くの日帰り客を集めている。

温泉口に3億5,000万円を投じて新設された環境省「ふれあい・やすらぎ温泉地」補

助事業の日帰り温泉施設「四万清流の湯」も好評で、毎年8万人台の入浴客数を維持している。さらに、既存の共同浴場も改装され、それまで住民しか入れなかったものを開放したため、一般観光客が入れる共同浴場が3つになり、湯めぐりが可能となった。現在では無料・有料合わせて6カ所の外湯があり、日帰り客を含めて人気を博している。

温泉は古来、神経痛・リウマチ・皮膚病・切り傷・すり傷などに効能があり、特に飲泉は胃腸病に効果があると言われてきた。飲泉や伝統的な蒸し湯が四万温泉の特色でもあるので、集落内には飲泉所が個人所有を含めて設置されており、また最近では足湯を楽しめる施設が設置されるなど、温泉を多面的に楽しめるように整備されつつある。

(3) 宿泊客と旅館経営の変化

次に、高度経済成長期から現在までの宿泊客および旅館経営の変化について考察する。図2は、1965年から2004年現在の半自炊客・一般観光別の延宿泊客数および消費金額の経年変化を表したものである。これによると、当初、半自炊客が一般観光客を大幅に上回っていたが、1970年代中頃の高度経

済成長期最盛期に急激に減少し、1974年頃に一般観光客数が半自炊客数を超えることになった。同時に、消費金額も上昇を続け、1980年代初頭から2004年現在を比較すると、1人当たりの消費金額は約3倍となっている(図2)。

続いて、高度経済成長期から安定成長期を経て現在に至るまでの四万温泉における旅館経営および宿泊客構成の変化について、1970・1982・2004年の3時点におけるデータをもとに分析したい。表1は地区別宿泊客構成を表したものであり、図3は旅館ごとの延宿泊客数と半自炊形態の有無についての地域変容を示している。第2次世界大戦後、田村・積善の有力2旅館が半自炊形態を守ってきたので、四万温泉の保養機能が強く維持されてきたことが明らかである。

四万温泉では、長い間旅館が御飯と味噌汁を出し、副食は惣菜を宿に売りに来るものを買って湯治客が賄う「伺い式」と言われる半自炊制が一般化していた。1970年をみると、1軒を除いて全ての宿泊施設において半自炊形態が維持されていた。延宿泊客数の内訳も、有力旅館を中心に半自炊客が一般観光客

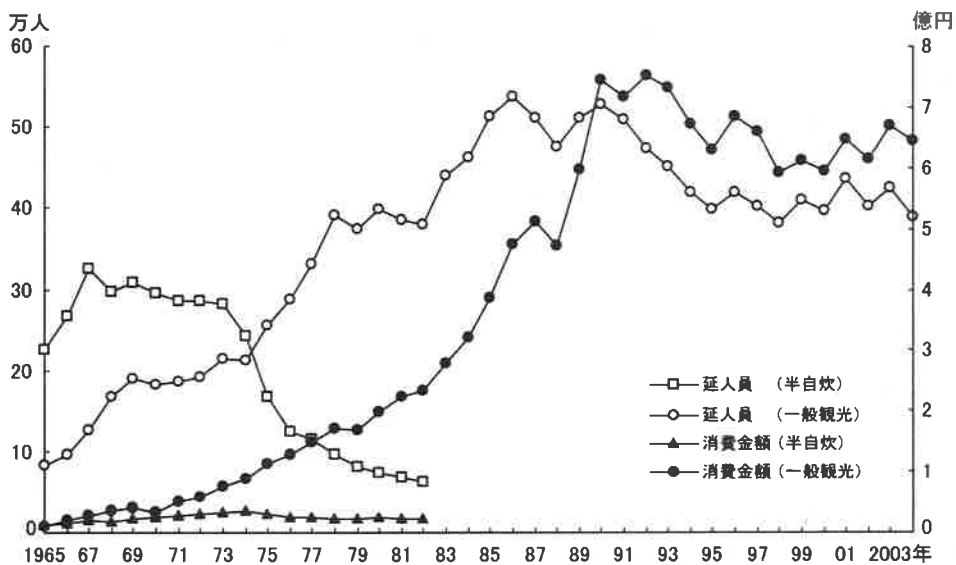


図2 四万温泉における延宿泊客数と消費金額の推移(1965～2004年)

(注) 四万温泉協会の資料により作成。

表1 四万温泉における地区別・形態別宿泊客構成(1970・1982・2004年)

年次 形態 地区	1970年				1982年				2004年					
	半 自 炊	観 光	計 (千人)	%	半 自 炊	観 光	計 (千人)	%	定員 (人)	%	観 光 (千人)	%	定員 (人)	%
温泉口	39	23	62	13	30	30	7	373	10	26	7	383	11	
山口	68	30	98	21	14	90	104	23	725	21	90	23	639	19
新湯	138	65	203	42	45	129	174	39	1,344	38	162	41	1,430	42
ゆずりは	2	27	29	6	38	38	9	200	6	47	12	390	11	
日向見 (民宿)	48	38	86	18	4	81	85	19	677	19	65	17	560	17
計	295	183	478	100	63	380	443	100	3,526	100	390	100	3,402	100

(注) 四万温泉協会の資料により作成。1982年のみ民宿は地区に含まれていない。2004年は半自炊旅館1軒のみで、統計はなし。

の約2倍近くを占めているところが多く、当時の湯治場としての盛況の様相が伺えるのである。

しかし、1980年代以降、国民生活・交通網・観光志向性などの変化が顕著となり、東京観光市場に近接している四万温泉では、旅館経営者が半自炊形態から賄い付きの観光旅館へと切り替えるようになった。1982年の時点では、43軒中各地区の有力旅館を中心に13軒の宿泊施設において半自炊形態が認められたが、半自炊客の比率はそれぞれ大幅に減少した。特に、新湯地区の2大有力旅館において半自炊が維持されていたので、半自炊客はこの地区に集中している。

2004年現在では、1軒を除いて半自炊は消滅し、一般宿泊客数のみのデータとなった。3時点の経年変化を見て、半自炊の消滅に伴う滞在日数の大幅な減少により、延宿泊客数は有力旅館を中心に相対的に若干の減少が見られる。とはいえ、保養のための滞在への需要は多く、賄付きや外食に依存した低料金旅館では2～3泊が多い。特に、新湯や山口の有力旅館では、このようなニーズへの対応が図られており、延宿泊客数にも反映されていて若干の増加を示している。

宿泊料金は41旅館中23軒が7,000～9,000円ほどであり、その他の旅館も1万円台前半のものが多く、有力旅館でも6,000円のB&B(1泊朝食付)形態を取り入れて

いる。近年、2泊から3泊の旅行者にターゲットを絞ったロングステイプランが四万温泉協会の旅館部で企画され、料金も3,800円からという低料金である。各種マスメディアで情報が発信されたこともあり、集客数も増加の一途を辿っている。現代社会におけるニーズの志向性を的確に捉えることで、東京観光圏の温泉地の中では特異な存在として人気を博している。四万温泉では現在、6,000円の民宿から3万円以上の高級旅館まで、旅館の棲み分けが明確になされている。これによって、経営者間の情報交換が活発に行われるとともに各々の位置付けが明確になっている。地域内の過当競争が排除されるとともに、温泉旅館のニーズに対する選択肢の広がりにも繋がっており、評価されるのである。

次に、延宿泊客の宿泊形態別季節性の変化をみると、図4のようである。

1965年をみると、半自炊客の場合は、ピークが8月であり一般観光客は8月と10月がそれぞれピークとなっているが、各月とも半自炊客が約70%以上の高い比率を示している。特に、12月は87%、2月は83%と半自炊客が多数を占めており、湯治場としての性格を強く持っていた。しかし、1982年を見ると、半自炊形態から賄い付きの観光旅館へと相次ぐ旅館経営の変化に伴い、半自炊客と一般観光客の比率は逆転した。半自炊客は各月とも約10～20%となり、これに対して一

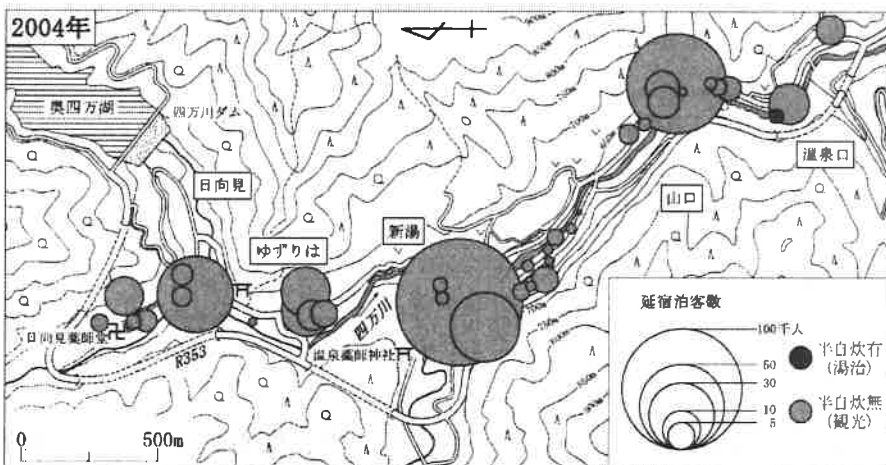
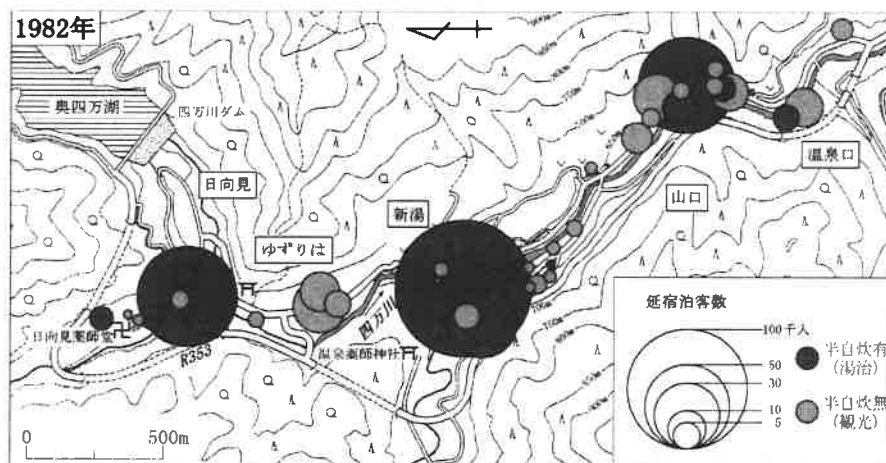
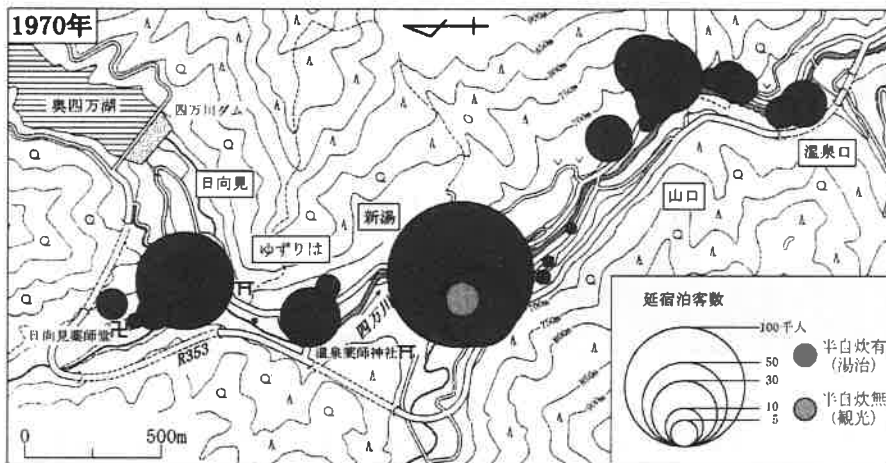


図3 四方温泉における旅館別延宿泊客数および宿泊形態の変化(1970・1982・2004年)
 (注) 四方温泉協会の資料により作成。

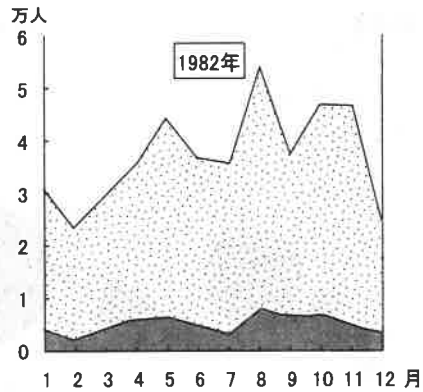
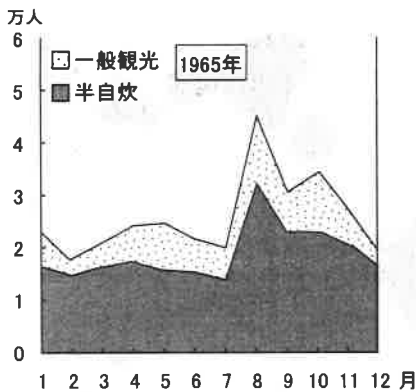


図4 四万温泉における延宿泊客数の宿泊形態別季節性の変化(1965・1982年)

(注) 四万温泉協会の資料により作成。

般観光客は群馬県・埼玉県・東京都をはじめその市場は広域になり、ピークも地域的な季節配分がなされている。

ここで、四万温泉を訪れた宿泊客について、ヒアリングをした2事例の結果を記す。

① 63歳男性と62歳女性の夫婦。

神奈川県藤沢市から自家用車にて来訪した。2泊3日と短期ではあるが、目的は療養・保養である。これまでに一度来湯した。主人は定年後、週2日くらいで出勤しているが、体力不足と持病の腰痛・神経痛・更年期障害などが重なり、今後仕事を続けられるか不安を感じて定期的に温泉療養を始めようと決意した。首都圏で保養できる温泉地を探したところ、最近ドラマの舞台となり、インターネット・雑誌など各種メディアに頻繁に登場している四万温泉に決定した。一度足を運んでみたところ、情緒ある集落景観と豊かな自然、そして何よりも共同浴場など温泉の質に感動し、定期的に通うことにした。自然の中で川沿いや集落内を歩いたり、共同浴場に入りながら心身ともに絶大な効果を感じるという。長期滞在の湯治というわけにはいかないが、短期滞在で効果的に温泉療養・保養が出来る点に、この温泉地の良さを感じる。国民保養温泉地に指定されていることについては知らなかったが、このような普段時間がない都市

住民でも通える保養温泉地が、今後もっと整備されてほしいという。

② 26歳男女。会社員。

埼玉県比企郡吉見町から自家用車にて来訪した。1泊の滞在であるが、目的は保養である。四万温泉を選んだ理由は、最近頻繁に発行されているあらゆる温泉雑誌に必ず四万温泉があげられていることと、あるテレビ番組の特集を見てとても印象が強かったことをあげている。また、日頃のストレス解消・疲労回復が第1の目的であり、今後日帰りでも頻繁に通えるような温泉地を探した結果、四万温泉を選んだという。素晴らしい雰囲気、宿や浴場自体が貴重な建物であるにもかかわらず、宿泊料はリーズナブルである。周辺の景観や観光資源も素晴らしく、時間さえあれば長く滞在したい。しかし、テレビドラマの影響で日帰りの観光客や自家用車も多く、若干騒々しかったのが残念である。今後、メディアの影響でますます人気が高まると思うが、せっかく発見した貴重な温泉地なので歓楽地化しないでほしいという。

3 国民保養温泉地としての四万温泉のあり方

四万温泉は10数年前から「新湯治場宣言」を発信し、数泊の滞在による国民の保養・健

康に役立つ温泉場として位置づけ、地域をあげてその具体策を提示してきたことは高く評価できる。まず、環境省の国民保養温泉地事業を積極的に展開し、遊歩道・苑地・温泉プール・温泉館・共同浴場などを配置し、環境保全に配慮してきたこと、2泊以上の滞在客を受け入れるために、2002年度冬期間（12～3月）、半数以上の参加旅館のもとに低料金を設定した各種プラン「冬旅設計」を発表したことなどである。

また、四万温泉には、常勤医がいる診療所があるが、国民保養温泉地として重要な温泉療養の相談・診察や健康相談などに関しては、さらに専門の温泉療法医の配置を検討することが必要である。

さらに、四万温泉の各地区には、国重要文化財日向見薬師堂・天然記念物四万川ひよろし颯穴群・登録文化財積善館と情緒ある慶雲橋や田村本館の茅葺玄閑など見所が多く、近くに四万川ダム・奥四万湖もある。近年、都会の若者や中年女性グループなども四万温泉の情緒や自然環境、温泉の良さなどに魅力を感じて来訪している。これらの客や滞在客などに対して、地域内を案内する地域ガイドシステムを早急に立ち上げることが急務である。

温泉客がガイドとともに地域内を歩いて触れ合い、四万温泉の歴史や自然環境の特色を学び、さらに4カ所もある無料の外湯に浸かって疲れを取る幸せを味わうことこそ、国民保養温泉地としての四万温泉にとって、まず検討されるべきことであると考えられる。

最近では、NPOによる空き店舗の利用によって、歩ける温泉街への取り組みにも力が入れている。このNPOも地元の旅館や商店の若手経営者で設立・運営されており、一定の成果が現れてきた。具体的には、土産品店兼旅館の空き店舗を県と町の活性化事業の補助金を活用して改築し、「喫茶兼土産品店」に足湯をセットしてオープンしたことがあげられる。

過去には、温泉街よりも個々の旅館の個性

が重視されて無秩序な旅館が建ち並び、結果として温泉街の景観が損なわれ、温泉情緒が失われた。しかし、ここに来てようやく、温泉街の重要性が認識されつつある⁹⁾。今後、街並み景観の保全・再生に向けて、早急に検討がなされるべきである。

4 むすび

本論文では、特に高度経済成長期末の1970年代前半から、1980年代後半の観光化を経て現在に至るまでの四万温泉における地域変容について明らかにするとともに、今後の国民保養温泉地としての四万温泉のあり方について考察した。以下に、その結果をまとめた。

①四万の温泉は、質量ともに優れており、2002年現在、平均60℃という高温のナトリウム・カルシウム塩化物・硫酸塩泉が毎分3,400リットルも湧出している。温泉湧出量は高度経済成長期の1969年に比べて2倍に増えた。この間、宿泊収容定員は1.3倍に増えたものの、収容定員1人当たり温泉湧出量である温泉資源指数は、0.7から1.0へと高まった。また、環境省「ふれあい・やすらぎ温泉地」補助事業の日帰り温泉施設「四万清流の湯」が開発されたのをはじめ、既存の共同浴場も一般に開放されたり、飲泉所や足湯が整備されるなど、日帰り客を含めて温泉を楽しむことが新たな客を吸収することにもなっている。

②四万温泉の宿泊客は、高度経済成長期においても半自炊の湯治客・保養客が一般観光客を大幅に上回っていたが、1974年頃に一般観光客数が半自炊客数を超えて逆転した。1980年代以降、旅館経営者は国民生活・交通網・観光志向性などの社会経済変化に対応して、半自炊形態から賄付きの観光旅館へと変化させた。その結果、現在半自炊形態を残す旅館は1軒のみとなったが、宿泊料金がリーズナブルで静かな滞在型保養温泉地への需要は高まっている。

③四万温泉では、四万温泉協会が10数年前から「新湯治場宣言」を発信し、ロングステイプランを企画して数泊の滞在による国民の保養・健康に役立つ温泉場の復活を図ってきた。多くの旅館が、共生の視点でこのような地域をあげての具体策に参加していることは、高く評価できる。

④国民保養温泉地の最右翼としての四万温泉は、温泉療養の相談や健康相談などができる専門家を配置することが必要である。また、温泉地内や周辺には多様な自然・文化観光資源が存在しており、都会の若者や中年女性グループが様々な魅力を感じて来訪しているので、地域内を案内するガイドシステムを立ち上げることが検討されると良い。

⑤四万温泉の旅館経営が半自炊形態から賄付きの観光旅館形態に変わったとはいえ、客のニーズは素晴らしい温泉資源と自然環境に加えて、温泉情緒豊かな地域景観にあり、まさに国民保養温泉地が目指す持続可能なウエルネス温泉地の形成が求められているのである。

注・参考文献

- 1) 山村順次 (1990) : 『観光地域論—地域形成と環境保全』古今書院、334 頁。
同 (1974) : 「国民保養温泉地としての群馬県四万温泉」。温泉、42 巻 1 号、44~46 頁。
- 2) 丸山知良編 (1977) : 『四万温泉史』四万温泉協会、334 頁。
- 3) 川島武宣・潮見俊隆・渡辺洋三編 (1964) : 『温泉権の研究』頸草書房、631 頁。
- 4) 前掲 2)。
- 5) 前掲 2)。
- 6) 前掲 1) (1990)。1888 (明治 21) 年の延宿泊客数は約 4 万人であったが、明治末期の 1921 年には約 8 万人へと倍増し、1921 (大正 10) 年には 12 万人を数えるほどとなった。1899 (明治 32) 年の宿泊客のうち、群馬県が 75% を占め、以下埼玉県 14%、東京府 6% であったが、1933 (昭和 8) 年には東京府が 51% で最も多く、以下群馬県 28%、埼玉県 9% となった。
- 7) 前掲 1) (1990)。
- 8) 山村順次 (2005) : 「温泉資源性の変化と温泉地経営」。温泉地域研究、4 号、9 ~ 16 頁。
- 9) 日本温泉協会 (2004) : 『環境省業務報告書 平成 16 年度国民保養温泉地における温泉の利用に関する検討調査』同協会、245 ~ 256 頁。

中国大連龍門湯温泉の開発と温泉利用

Development of Dalian Longmentang Spa and Utilization of Hot Spring in China

于 航* 山村 順次**
Hang YU Junji YAMAMURA

キーワード：温泉開発 (spa development)・温泉利用 (utilization of hot spring)
龍門湯温泉 (Longmentang spa)・大連市 (Dalian city)

1 はじめに

中国では、1978年の改革開放政策によって経済開発が進み、都市が発展するとともに都市部の環境悪化も見られ、都市住民にとっては激しい経済競争のために生活のリズムが速くてストレスを感じる人々が増えている。こうした社会経済環境の変化のなかで、心身の疲労回復を求める温泉観光が盛んになってきた。

そこで現在、全国的に温泉開発ブームが起こっており、温泉資源は観光資源の一部として重視されるようになった。特に、中国南部の珠江デルタ地帯の経済発展地域では、中山・御・石岩湖温泉などの温泉地が新たに開発されて、露天風呂などを整備して著しい発展をとげている¹⁾。また、重工業地帯でもある中国東北地方でも、これまでは労働者のための温泉療養院が各地に設置されて大きな役割を果たしてきたが、近年、その機能変化が起こりつつある。すなわち、温泉地では従来の療養・保養を目的とした利用者だけではなく、観光客を積極的に受け入れようとする傾向が強まってきたのである²⁾。

こうして、中国の観光が活発化するなかで、温泉地への志向性も高まっており、ここに地域振興を踏まえた温泉地計画の重要性が指摘されるようになってきた。近年、中国の温泉地開発とそのあり方に関する研究が発表され

つつあるが³⁾、本研究では、中国東北地方遼寧省における新興温泉地のひとつである大連大都市圏瓦房店市龍門湯温泉を事例として、開発資本・観光客特性・地域社会の変容などを明らかにすることを目的とし、今後のあり方についても付言した。

2 龍門湯温泉の開発過程

(1) 大連周辺の温泉地

中国東北地方の遼寧省には、1994年現在で42カ所の温泉地があり、そのうち温泉療養を温泉利用目的とした温泉地は13カ所、温泉観光は6カ所、農業・漁業は3カ所であり、残りの20カ所は未開発であった⁴⁾。遼寧省で著名な温泉地として、まず鞍山市郊外にある湯崗子温泉があげられ、広大な敷地を有する温泉療養院を中心に温泉療養・保養が行われてきた。同じ形態の温泉地として熊岳・興城・五龍背温泉などがあるが、これらの温泉地は温泉療養客に対する国の補助制度がなくなり、したがって温泉療養院はいずれも停滞傾向にある。そこで、安波温泉では1泊滞在型の観光温泉地の機能を強めたり、スキー場を開発して新しい経営方向を模索しているし、湯崗子温泉も観光ホテルを新設して経営の向上を図っている⁵⁾。

こうした中で、近年では大都市周辺で温泉を掘削し、大浴場や露天風呂などの温泉施設

* 千葉大学大学院 (Graduate School of Chiba University) ** 千葉大学教育学部 (Chiba University)

を整備して、都市住民の温泉利用を促進する開発が進められてきた。遼東半島南端の大都市大連周辺で特に著しく、旅順の老鉄山温泉や瓦房店市龍門湯温泉などはその例であり、さらに大規模な温泉開発が進捗しているのである⁶⁾。

(2) 温泉資源と開発投資

龍門湯温泉リゾートは、大連の中心から北へ140km、大連瓦房店市の最北端の許家屯鎮龍門湯村で開発された⁷⁾。許屯鎮龍門湯村と腰屯村間の国道“双龍”が東西に、国道“普熊”“許蔡”が南北に走っていて町の中心と連絡している。瀋陽大連高速道路及びハルビン大連高速道路李官出口まで7kmの位置にあり、遼寧省の省都瀋陽まで245kmのところにある。大連と瀋陽の大都市を結ぶ大動脈の高速道路が開通し、いずれの都市からも1時間半から2時間半ほどで到達できるので、交通上の好立地条件下にある。

龍門湯温泉は、瓦房店市において唯一地表面に温泉水が滲み出す地熱資源であり、500年前から温泉の存在が伝えられている。大連水文地質工程地質監察院の測定によると、温泉の温度は63～71℃、主にナトリウム・カルシウムや炭酸・硫酸などの成分を含み、pH値は7.1～7.4の中性泉である。5本の源泉

があり、深度は55～280mで、1日の温泉湧出量は3,000～5,000tに及び、温泉資源は豊富である。

1997年、龍門湯温泉地の建設が正式に始まった。大連及び瓦房店政府からの支援を受け、大連企画設計研究院は1年近くをかけて1999年にリゾート地の全体プランを完成させた。温泉地の土地割りと土地利用区分は、主に街道に沿って帯状に計画された。開発総面積は5.57km²、建設面積は2km²であり、温泉浴・保健・娯楽などたくさんの内容を盛り込んだ総合的リゾート地の建設を目指している。

2004年8月までに16の投資家を誘致し、2000年の投資額は4,470万円(約5億8,000万円)、そのうち国内資本は2,800万円で62%、外国資本は1,670万円で38%を占めた。2001年の投資額は9,000万円へと倍増した。16企業のうち、すでに5つのホテルは建設を完了して開業しており、ベッド数は500である(図1)。2つのホテルは営業前の段階、残りは建設中である。2010年までにリゾート地は30の投資家を吸引し、10億元の資金を集めて少なくとも20企業が営業できるようにし、ベッド数は1万を目標に計画を立てている。

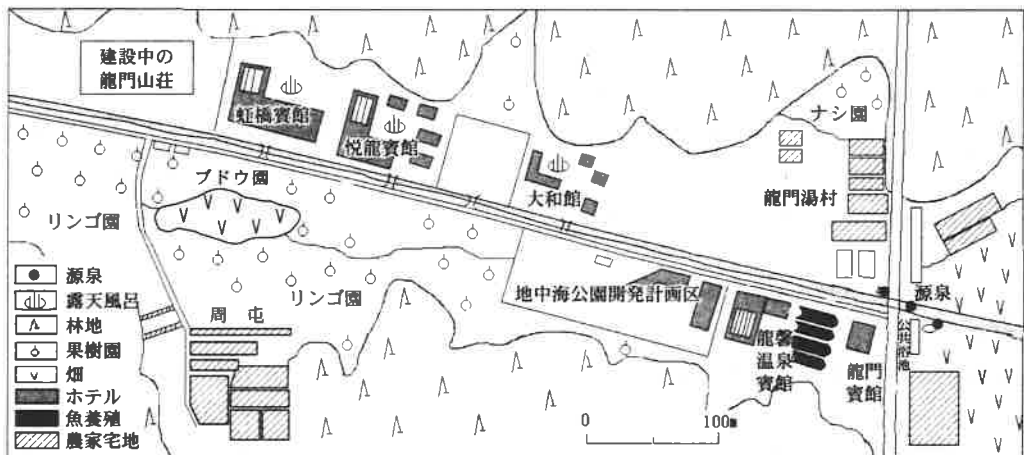


図1 龍門湯温泉リゾートの地域構成(2005年)

(注) 現地調査により作成。

(3) 宿泊施設の建設

温泉地開発が始まった当初、建設の進捗度はやや緩やかであった。その大きな理由は、龍門湯の北に歴史の長い熊岳温泉があり、南に新興の安波温泉があったからである。龍門湯温泉は地理的には鉄道や高速道路出口に隣接して交通は便利であるが、北の大連からの客は熊岳温泉を目的にし、南の大連からの客は安波温泉を選んだことが以前多かった。しかし、特に2003年以後、龍門湯温泉の開発が活発化して、近接の熊岳温泉・安波温泉と「三足鼎立」の状況に変わってきた。ここで、旅館の一覧をまとめたのが表1である。

1995年、リゾート地内で最初の温泉旅館である大和館が、瓦房店市出身の在日華僑の出資で開設された。本館1棟と別館4棟の純和風建物である。当初から温泉開発ブーム到来するまでの10年間、苦しい経営状況が続いていた。2004年に大規模なリフォームをして再オープンした。現在、投資家から依頼された友人が、実際の営業を担っている。個人客向けの普通部屋は280円、団体客向けの別館（5つの和室と2つのツインルーム）の1日利用料金は6,000円である。娯楽施設が不足しているので団体客が少なく、その一方、閑静なプライベート環境を求める個人や

表1 龍門湯温泉リゾートの宿泊施設概要（2005年）

旅館	開業年	投資者	投資金額 (円)	面積 (㎡)	従業員 (地元)	部屋 数 (室)	収容 人員 (人)	料金(円)		
								宿 泊	入 浴	プ ール
大和館	1995年	瓦房店市出身の 在日華僑	不詳	8,000	15(15)	13 別荘 4棟	100	280		
悦龍賓館	1999年開業 2004年再開	瓦房店企画設計 院開発：2000年 大連万衆房地產 公司買収	1,800万	10,000	40(30)	56 別荘 4棟	130	260	10	25
虹橋温泉 賓館	1999年	大連西崗区房産 局開発	2,000万	10,000	60(10)	49	140	320	38	38
龍門賓館	2003年3月	龍門湯村書記	200万	2,500	9(3)	20	40	120	10	
龍馨温泉 賓館	2004年10月	許屯鎮農民	300万	7,000	20(6)	35	70	150	10	25
地中海温 泉公園	2005年中 (予定)	大連聖亜海洋世 界有限会社開発	3,000万	60,000						
龍門山荘	2006年12月 (予定)	大連中盛集団開 発	1期 5,000万 2期 7,000万	400,000						

(注) 2004年8月と2005年7月の現地調査及び許屯鎮政府での聞き取り調査により作成。

家族連れ、親戚・友達の小グループ客が多く訪れ、経営は安定している。

悦龍賓館は瓦房店企画設計院の投資であり、1997年に建設された。当時悦龍賓館の設計者である瓦房店企画設計院の職員が大連万衆房地產公司を設立し、2003年に悦龍賓館の経営権を買収した。1年間をかけて現有建物に新たに内装を充実し、2004年に営業が再スタートした。総面積は約10,000㎡で、従業員は40人、大連市・瓦房店市及び龍門湯村近くの若い女性が多く雇用されている。経営者は月500～800元の給料を払うほか、ホテル側が従業員に宿泊と食事を提供している。悦龍賓館の施設は庄祥閣・悦龍軒・龍鳳居と山呈楼の4つの別荘(26室)と主体楼(56室)で構成され、ベット数は130、室内プールと露天風呂もある。入浴と温泉プールの利用料金は25元であり、露天浴場の場合は10元で大連市内よりやや安い値段で観光客に提供している。室内温泉プールがにぎやかである一方、露天浴場は人工的に作られた雰囲気や各別荘施設の真ん中の空き地に位置するためか、利用客は少なかった。

1999年、大連西崗区房産局が2,000万元を投資して開発された虹橋温泉賓館は、龍門湯温泉リゾート地における規模・収容力・質的レベルがトップである(写真1)。

このホテルは大規模な露天浴場と滝湯、大型室内温泉プールなどの温泉施設を有し、人気が高い。従業員は60人余りでそのほとんどは大連市などからやって来ている。温泉施設利用料金は入浴と温泉プールのセットで38元、露天浴場は12元である。この料金は中国南部の入浴料が約100元であるのに比べて安く、東北地方の経済発展段階が相対的に低次であることを示している。客室は49部屋であり、収容人員は140人である。大連市政府の会議や商談など、大型の経済活動による団体客を中心に利用され、1泊2日の費用は公費で賄われ、大変に混雑している。

龍門賓館は2003年3月、龍門湯村書記の戦氏が銀行から10年間返還を期限に200万元を借金して開業した。現在書記の夫人劉氏が経営している。賓館は3階建てであり、1階が入浴、農家風料理を中心、2階が宿泊施設として使われ、3階の一部は経営者の家族達が使用している。源泉が一番距離近いので、62℃ぐらいの高温湯が水を加えて使用されており、1回10元で入浴することができる。2階に14の部屋あり、80～120元の宿泊料金で利用できる。従業員は9人であり、うち3人は親戚の若い女性であった。

龍門賓館の隣に、もと魚養殖場を営んでいた地元許屯鎮出身の農民が200万～300



写真1 龍門湯温泉リゾートの温泉ホテル(2004年)

(注) 2004年8月于航撮影。

万元を投資し、3階建ての龍馨温泉賓館と4連棟の長さ100m、幅15mの温泉魚養殖場を作った。総面積は7,000㎡に及び、2004年10月にオープンした。室内温泉プールと室内釣り場や室内洞窟温泉は龍馨温泉賓館のオリジナルな施設である。

その他、2003年11月に大連の有力企業である聖亜海洋世界有限公司が聖亜瓦房店温泉開発を決定し、4,500万元を投資して地中海温泉テーマパークを企画しており、現在、施設整備が進んでいる⁸⁾。

また、大連中盛集団会社が1期5,000万元、2期7,000万元を投入して龍門山荘を建設中である。この24階建ての大連十州雲水暇日酒店は、龍門湯温泉リゾート地最大規模の高級温泉ホテルとなり、2006年12月に完工する予定である。さらに、香港や日本の資本によるスキー場の契約も交渉中である。これらの大規模な投資は、龍門湯温泉地の将来の発展趨勢を大きく左右すると考えられる。

3 龍門湯温泉の宿泊客

(1) 宿泊客の特性

まず、新興の龍門湯温泉に宿泊客がどこから集まってくるのか、車のナンバー調査をした(表2)。2005年7月16日(土)の午前9時頃、各旅館別に39台の駐車ナンバーをみると、4分の3は大連からの客であった。

また、収容力100人以上の規模の大きな虹橋温泉賓館と悦龍賓館において、広域的に客を集めていることが伺えた。

悦龍賓館の別荘の利用客は、主に大連市・瀋陽市・瓦房店市からの会社・役場などの団体客であり、30人近くの規模で週末に来訪し、1泊2日の滞在をする形態が最も多い。また、夏休みを利用して大連市の小学生と親たち40人の団体が室内プールを目的に訪れており、いまだ団体客が中心の段階にある。

ここで、龍門湯温泉の宿泊客の実態を明らかにするために、聞き取り調査の結果をまとめた(表3)。調査対象人数は168人、そのうち志向性調査では36人である。

龍門湯温泉は大連近郊の温泉地であって、都市の週末利用者が多いので、夏休み最中の週末に実施した。2005年7月14日(木)・15日(金)・16日(土)に、開業しているホテルの龍門賓館・龍馨温泉賓館・大和館・虹橋温泉賓館・悦龍賓館の客を対象とした。そして、客が最も集まる朝食・ランチ・夕食の時間に聞き取り調査を行った。調査は主に18歳以上の男女の宿泊客を対象とし、調査内容を「宿泊客の特性」と「龍門湯温泉についての印象・志向性」に分けて実施した。

宿泊客の特性については、宿泊客の70%は大連、97%は東北3省から訪れたことが分かった。性別は男性が57%、女性が

表2 龍門湯温泉リゾートにおける来客者の居住地(2005年)

居住地 旅館	大連	撫順	營口	黒龍江	内蒙古	(公安 ・軍)	計 (台)
大和館	2						2
悦龍賓館	9	1		1		1	12
虹橋温泉賓館	12		2	1	1	2	18
龍門賓館	3						3
龍馨温泉賓館	4						4
計	30	1	2	2	1	3	39

(注) 2005年7月16日午前9時の現地での車ナンバー調査により作成。

表3 龍門湯温泉リゾートにおける宿泊客の特性（2005年）

出発地	大連市（70%）吉林省と黒龍江省（27%） その他（3%）
性別	男性（57%）女性（43%）
年齢	20代（11%）30代（27%）40代（24%）50代（29%）60代（7%）70代（3%）
職業	会社員（46%）公務員（21%）退職者（28%）自営者（1%）その他（4%）
旅行形態	会社旅行（85%）親族・家族旅行（8%）友人・同僚旅行（4%）個人（1%）その他（2%）
同行者	1～2人（6%）3～5人（9%）6人以上（85%）
交通手段	電車（27%）観光バス（61%）自家用車（8%）タクシー（3%）会社車（12%）
来訪目的	観光（30%）療養（15%）保養・ストレス解消（26%）休養（5%）
来訪頻度	1回（58%）2回（33%）3回以上（10%）
滞在期間	1泊（87%）2～3泊（12%）4泊以上～1週間以内（1%）
旅費（1日個人負担分）	100～300元（43%）300～500元（25%）500～1000元（21%）1000元（11%）
選択の際重視する要素*	宿泊施設（77%）交通の便利さ（69%）サービス水準（46%）周囲環境（38%）価格（38%）泉質（23%）有名度（15%）気候（8%）
情報入手方法*	以前から知っていた（38%）親族友達から聞いた（31%）観光パンフレット・雑誌（23%）テレビ・インターネット（8%）
温泉効果*	大変有り（15%）有り（85%）あまり無い（0）まったく無い（0）
温泉地の印象*	大変良い（15%）少し良い（46%）普通（23%）少し悪い（8%）悪い（8%）
次回来訪希望*	是非来たい（15%）機会あれば来たい（62%）来たくない（15%）分からない（8%）

（注）アンケート調査により作成。サンプル数は168人。*のアンケートはサンプル数は36人。

43%であった。年齢構成は、50代29%、30代27%、40代24%が多く、中年層を中心に全体の80%を占めた。職業については、会社員46%、退職者28%、公務員21%、その他（学生・フリーターなど）4%、自営者1%の順であった。旅行形態については、85%が会議出席や会社の慰安旅行に参加したと答え、その他に親族・家族旅行は8%、友人・同僚との旅行は4%、出張などのその他は2%、個人旅行は1%と続いた。

同行者について、6人以上のグループが85%を占め、職場などの団体客が主流であることが判明した。交通手段のなかで、以前と比べれば自家用車の利用が8%でかなり増

えている。自動車の普及により、大都市周辺の観光はますます活発化になると言える。龍門湯温泉は新興温泉地であり、宿泊客の58%は初めての来訪であった。観光の潜在マーケットは非常に広いのである。同じ職場の団体客でも、温泉利用の目的はそれぞれ違う。

観光目的が30%であるほか、ストレス解消のためと答えたのが26%にもなり、それは会社員・公務員と自営者の人々であった。競争が激しい中国社会においては、疲労を回復し、心理的圧力を和らげる目的で温泉を利用する人は少なくない。滞在期間と費用については、週末の1泊2日が87%と圧倒的に

多く、1人当たりの消費水準は100～300元が43%、300～500元が25%、500～1000元が21%、1,000元以上が11%であり、かなりの格差が認められた。

(2) 宿泊客の印象と志向性

次に、龍門湯温泉についての志向性を36名に質問した。温泉地を選択する際、重視する要素としては(複数回答)、宿泊施設77%、交通の便利さ69%、サービス水準46%、周囲環境38%、価格38%、泉質23%、有名度15%、気候8%の順であった。そこで、泉質よりは施設などのハード面を重視するのが、中国温泉利用者の現段階の特徴であると言える。また、交通の便利さを重視する理由としては、週末の時間を有効合理的に利用したい、出費を少なくしたいことなどが考えられる。龍門湯温泉情報の入手方法については、以前から知っていた38%、親族友達から聞いた31%、観光パンフレット・雑誌23%、テレビ・インターネット8%の順であり、口コミのウエイトが高い。

温泉効果は、「大変有り」は15%と少ないが、85%は「有り」と答えている。龍門湯温泉リゾートの印象を聞くと、「大変良い」15%、「少し良い」46%、「普通」23%、「少し悪い」8%、「悪い」8%であった。最後に、次回の来訪希望に対しては、62%が「機会

あれば来る」と答え、「是非来たい」と「来たくない」が、各15%であった。

4 龍門湯村の地域住民

(1) 地域住民の温泉利用

2000年現在、1人当たりの年収人がわずか1,800元の龍門湯村地域住民にとっては、リゾート地域内の温泉施設の入浴料金はあまりにも高すぎる。そこで、鎮政府が出資して共同浴場を作った。地域住民は無料で入浴でき、地域住民以外は2元を徴収する規定が設定された。

500年前に発見されたという龍門湯温泉は、当初地域住民たちは川の中にある源泉の近くで「野浴」していたと言われる。現在でも、この野浴の風習が続けられている(写真2)。昔から温泉の利用は輪番制であり、昼間(朝8時から夜7時の間)は男性が農作業をしているので女性が入浴したり、洗濯をして温泉を専用している。夜(夜7時から翌朝8時までの間)になると、男性が温泉に入って1日の体の疲れを取りながら、お互いに情報を交換し、交流しているのである。2004年の秋、鎮政府は野浴を大切な文化として認識し、保護することになった。川中の源泉の近くに3つの丸い温泉池が設置された。

2005年7月15日の調査当日、地元の共

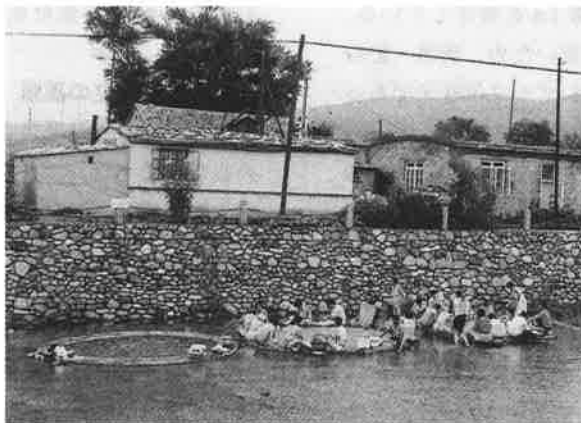


写真2 龍門湯温泉における地域住民の入浴風景(2005年)

(注) 2005年7月于航撮影。

同浴場が故障のため、野浴に入る人が普段よりやや多かった。地元許屯出身の許氏(男性、86歳)に聞くと、許氏は冬を除く大体毎朝5時に起床、朝食を取った後の6時ごろに家を出て30分ほど歩いた後、この温泉に入るといふ。

(2) 農民の観光副業

許屯鎮の人口の9割以上が農業を営んでいる。農民たちは主にトウモロコシ・大豆・果物等を栽培し、これらの収入に依存している。大連市政府は「大大連」を建設する計画大綱(2003～2020年)のなかで、貧困から抜け出すために瓦房店市を重点的援助対象地とした。地域経済を進展させ、資源開発を加速させるために、大連市と瓦房店市政府は投資を優遇する政策を推進した。こうした背景のもとに、大連瓦房店市龍門湯温泉の開発が始まったのである。龍門湯温泉開発をきっかけに、農民たちの収入が増え、生活を改善する見通しが立ちつつある。

2004年8月、虹橋賓館前で自家産の季節の果物を販売していた農民は4人いた。2005年7月には、虹橋賓館前12人、悦龍賓館前6人に増えた。その中のひとり地元龍門湯村出身の許氏(男性 55歳)は、5人家族であり、アンズ5本、スモモ600本、モモ50本、リンゴ200本(富士150本、国光50本)を持ち、トウモロコシ畑2a、サツマイモ畑2a、大豆畑1aを耕作している。これらの農作物は大変安いいため、農薬・肥料代を除いた年間収入はわずか7,000元であった。2004年には、虹橋賓館前で7月にスモモ・アンズ、8月にモモと茹でトウモロコシ、9月にリンゴなど自家産果物を観光客に販売した。そこで、平均収入は平日5～10元、週末になると10～20元程度になり、以前と比べると、年収が約1,000元増えたのである。

前述の野浴を楽しんでいる許氏は、人浴後家に戻って農業をする生活が50年近くも続いている。2003年に51aの山林を温泉開発用地として大連中盛集团公司に収用され、

10万円の補償金を受け取った。現在12人の大家族であるが、モモ200本、リンゴ100本、スモモ100本、サツマイモ畑2aを経営するほか、20頭の羊も飼っている。これらの収穫によって、年平均収入は8,000元から1万円となる。

5 龍門湯温泉開発の意義と課題

(1) 温泉開発の意義

龍門湯温泉のリゾート開発が龍門湯村の地域経済の発展に大きな意義をもったことは疑いを入れない。5軒のホテルの従業員144人のうち、地元民が64人、44%を占めているのである。また、この地域は豊かな果樹地域であり、しかもリンゴ・モモ・ブドウ・アンズなど多様な果物が栽培されている。味覚観光のみならず、花の咲く時期に花見の客を誘致することも可能である。実際、多くの果樹農家が果物の即売を始めていて観光農業が盛んになっており、低い農業所得を補っている。

また、経済発展が遅れている都市郊外の農村地域には、農家生活の体験でき、自然の生態に触れることができる環境が広く存在する。都市住民と農村住民との触れ合いを基にしたエコツーリズム的な観光旅行が、今後の方向性として意義を持つことになろう。さらに、大連観光に来る日本と韓国の外国人客が日増しに増えている現在、日韓風の温泉浴場を求める潜在需要を見通すことも大切である。

(2) 温泉開発の課題

ここで、龍門湯温泉開発に伴う課題をまとめることにする。

①大都市郊外の温泉地開発であるので、温泉地域文化の形成を促すことが必要である。中国の温泉旅行の現状をみると、地域文化に対する配慮が少ないのは問題である。1つは旅行には来たが、旅館内の活動しか行わない、観光地域内での活動が少ないことである。2つは温泉浴場だけの目的で来訪し、温泉地域の全体像を理解しないことである。

②龍門湯温泉にやって来る観光客をフリーマーケットに誘導することである。地域住民の収入を増やし、観光客との触れ合いを増すことになり、生活のレベルを上昇させることにもなる。

③温泉地旅館施設の建設においては、いままでのような画一的なコンクリート型の建築構造を再考し、多様化・個性化した心地よいものに切り替えることが望まれる。龍門湯温泉地は伝統的な素朴な建物を追い求め、外観の形状や色彩は周辺の自然環境に調和させることが大事である。

④温泉資源は貴重な地熱資源である。開発の過程でその独特な自然環境と社会環境を考慮しなければならない。温泉浴場に利用された後の排水や地域景観調和などの問題にも配慮する必要がある。

⑤龍門湯村の住民たちは、現在まだ水道水が利用できない状態にある。現在開業している5つのホテルのうち3つに温泉プールがあり、さらに1つが準備中であることから、過当競争を避けて地域社会の環境保全を考えること先決であろう。

6 むすび

龍門湯温泉リゾートの開発につき、以下の点を提言してむすびとしたい。

①地方行政機関に温泉管理・監督部門を設立すること：中国では、温泉に関するの法律と法規は全くないのが現状である。「温泉立法」は短期間を実現するのは難しいが、「地方法規」の形でまず試行することが大切である。日本の場合、温泉開発とともに温泉資源枯渇・景観破壊・環境汚染・浴槽衛生不備などが次第に問題化してきた。中国の現段階では、温泉開発はいまだ温泉の過度利用の域を超えてはいないが、大規模な温泉開発時代の到来が予想されるので、事前に温泉の合理的な開発、厳格な管理や監督機構を確立することは極めて必要である。

②温泉地で幅広く利用できる様々な活動メ

ニューを用意すること：温泉観光地本来の魅力は客を招くことだけではなく、客の足を留められることである。高齢化社会の到来に伴い、温泉地で健康維持のために中高年の利用者が増える傾向がある。長期滞在のため、温泉地での散歩道・郷土資料館・果物狩などや様々な運動メニューを充実し、運動と入浴を結合して健康増進に役立てるようにすべきである⁹⁾。中国の温泉観光は一般国民にとってはいまだ普及していないので、今後多くの人々に温泉を合理的・有効的に利用してもらうことは、中国温泉地開発の今後の方策として急務である。

③温泉地域住民たちの權益を優先擁護すること：これまで、特に農村部に位置する温泉地を開発する際に、代々生活している家と土地が開発資本または政府に買収される例は珍しくない。収入が少ない農民たちは目先の一時だけの利益に誘惑され、開発には全く関心を持っておらず、あるいは参加する機会が与えられないのである。経済が急成長している中国では、都市部と農村部の格差が拡大していく傾向は不可避の社会問題となり、3農（農業・農村・農民）問題も大きな課題として取り上げられた。開発を契機に、生活改善・地域発展を促すような、農民たちが歓迎する適正規模の温泉開発を切望したい。

本稿をまとめるにつき、調査の機会を与えていただいた（株）地熱の浜田眞之氏と中国東北財經大学の王艶平副教授に厚く謝意を表したい。

注・参考文献

- 1) 山村順次・王艶平 (2001)：「中国南部における温泉地の地域的展開」。千葉大学地理学研究報告 12号、1~11頁。
 - 2) 千航 (2005)：「中国遼寧省における温泉地域の現状と課題に関する研究」。千葉大学大学院教育学研究科修士論文、50~60頁。
 - 3) 王艶平 (2004)：『中国温泉旅游—来自地理学的發見及人文主義的挑戰』大連出版社、157頁。
- 小胡日查 (1999)：「中国内モンゴル阿爾山温泉地の形成と利用実態」。千葉大学地理学研

- 究報告, 10号, 41～50頁。
- 山村順次・王艷平(2000):「中国における温泉利用の変化と地域的特性」。千葉大学環境科学研究報告, 25巻, 44～49頁。
- 王艷平・山村順次(2001年):「中国温泉資源旅游利用形式的変遷及其開発現状」。地理科学, 21巻5号, 102～109頁。
- 4) 劉国海・仲桂清(1994):「遼寧省温泉資源開發利用研究」。『中国地域地質』中国地質出版社, 106～113頁。
- 5) 山村順次(2004):『世界の温泉地—温泉リゾートの発達と現状(新版)』日本温泉協会, 221～227頁。
- 6) 老鉄山温泉では、地下1,500mの大深度掘削をして温泉を確保し、開発途上の白銀山温泉では3,000mもの深さから温泉を得ている。
- 7) 王艷平・李文波・金麗・馬春玲・孫麗萍(2004):「龍門湯温泉旅游度假区基本狀況及其地中海温泉公園建設分析」。東北財經大學旅游酒店管理學院, 14頁。
- 8) この開発に関しては、筆者らも企画案作成に参加する機会があったが、和風を中心とした環境保全型温泉施設のユニークさを提示したもの、中国の経営者には大規模な温泉浴場で多数の客を吸収することを第1の経営方針としていた。
- 9) 山村順次(2003):「湯治場の現代意義と課題」。総合観光研究, 1号, 21～31頁。
- その他参考資料
- 大連聖亜海洋世界有限公司(2004):「大連市瓦房店龍門湯温泉項目可行性研究報告」。14～16頁。
- 瓦房店市史誌辦公室(2001):『瓦房店年鑑』。方志出版社, 184頁。
- 瓦房店市史誌辦公室(2002):『瓦房店年鑑』。方志出版社, 195頁。
- 遼寧省旅游局(1998):『遼寧省旅游政策法規選編(1991～1997)』。内部資料, 200頁。
- 遼寧省統計局(1999～2002):『遼寧省統計年鑑』中国統計出版社。

基調講演

阿智村の観光政策

岡庭一雄（阿智村村長）

現在、日本の観光温泉地は大きな課題を抱えているのではないかと思います。それと同時に、各市町村についても、国の財政が苦しくなっているという状況の中で、地域をどう発展させていくのか、あるいは日本のグローバル経済の中で、地域の経済をどう発展させていくのかということとは最大の課題になっている訳です。そういう点で、この日本温泉地域学会が単に温泉の問題だけをみるのではなく、地域全体の課題として温泉をいかに活用していくのかという形で提言をいただけることを、私どもは大変期待をしています。この学会が現在の課題を実践的に明らかにしていくことを目指していると伺い、このたび昼神温泉で学会を開催していただいたことを有り難く思っています。

昼神温泉のある阿智村の位置ですが、長野県の南の端の方にありまして、隣は愛知県です。それから、山を1つ越えると岐阜県で、越県合併で大変問題になった馬籠宿がある山口村、そして中津川市がすぐそこです。もう少し下って南の方へ行くと、静岡県ということになります。

長野県、信州は観光県ということになっている訳ですが、実は信州の観光は殆ど北信です。松本から北の方、上高地とか、あるいはスキーで言うと、山の緩やかなところが信州の観光地なのです。かつて、20年、30年前位に昔の国鉄が、木曽路号を東京から出して、木曽路がかなり知られてきた訳ですが、それでもまだまだです。特に、諏訪湖からこちらを南信と言うのですが、こちらには観光地がない訳です。1つは、中央アルプスに駒ヶ岳ロープウェイがあります。これは大勢のお客さんを輸送することが出来ます。もう1つは、

ここから少し行ったところに天竜川があります。天竜峡という名勝地がありまして、芸者の市丸さんという方が「天竜下ればよ〜いのほいのさっさ」と歌って、一世を風靡しました。これは天竜竜ですから、大体長野県、信州における観光客の10分の1も南信へ来ていなかったのです。今でも、その傾向には変わりはないのですが。

そしてまた、諏訪湖から南の方は温泉が出ないと言われていたのです。どちらかと言えば、観光不毛地、温泉不毛地のこの地域で、昭和48年に飯田市から隣の中津川市まで中央アルプスを越える鉄道、すなわち国鉄中津川線を誘致しようという話がありました。そのためには、中央アルプスを越えなくてはならないので、長大なトンネルが必要となります。そこで、トンネルの試掘をしようということで、これは昭和47年頃から始まりました。阿知川を挟んで対岸から少し奥に行ったところにホテル阿智川という大きなホテルがありますが、その山付けの所から中津川の方に向かって試掘を始めました。昭和48年2月7日に温泉が突然湧出しました。試掘トンネル工事していたところで、1月13日の夕刻、坑口から36mの地点で、硫黄分を含んだ20℃の温泉が出ました。当時の方達から話を聞くと、「わー」となったという話を聞きました。それで、「これはえらい事だ。温泉が出た。諏訪からこちらで温泉が出た」と。火山地帯がないところから温泉が出るということについては、当時は今のようない定説はなかった訳です。大騒ぎになりました。

現在のJRは金儲けのことを考えているから、絶対温泉権を渡さないでしょう。トンネ

ルが開通しても、鉄道事業より温泉で一儲けしようとするに違いないと思います。当時の国鉄の人達は純粋に鉄道を開けることに熱心でした。あまりに熱心すぎると、この前のJR西日本のような惨事を起こしてしまう訳ですが。

しかし、国鉄は温泉には目もくれずに掘削することに一生懸命になり、温泉の穴を埋めるということになったのではないかと思います。温泉が出るということが分かり、それが新聞に載ったので、土地所有者の所へその日のうちに為替が届くとか、あるいは電話で「私に権利を譲って欲しい」という話がまいこみ、地元の皆さんが「どうするか?」ということになったのです。

出湯30年にもなるので、当時のことを知っている方がいなくなりましたが、名古屋の業者がお金を持って掘削をするために昼神温泉に向かっていたらしいです。そこで、お金を出せば、ひよっとすれば、その人のところへ権利がいつてしまったらどうかという話ですが、実はその日は大雪で、清内路峠を車で通ることが出来ませんでした。その晩、地元の皆さんが集まり、温泉をどうするかということについて話し合いました。この大雪のお陰で、昼神の皆さんが温泉について話し合うことが出来た訳です。これもやっぱり、昼神という名前に神様がついていたからでしょうか。そもそも、昼神という名前は、色々な説がありますが、じつは神坂峠かみさかという峠がありまして、延喜式の昔は一級国道が通っていました。その一級国道が、この神坂峠と中央アルプスからこちら側が東日本なんですね。中央アルプスから向こう側はまさに大和朝廷が支配していた開けた国でした。東日本は未開の人間がいると信じられていました。ですから、神坂峠は難所の峠なのです。

多分、5世紀から6世紀位に、ここを支配するために大和朝廷が渡来人を送ったのではないかということになっています。ここは馬の産地なんですね。大和朝廷の騎馬隊はここ

で作られ、渡来人の方達が馬を生産して送ったということが、この頃明らかになってきています。そういう点で、このところは納得できて、地域と息が合った訳です。

ここに阿智神社が祀られています、この祭神は天八意思兼命（あめのやこころおもいかねのみこと）です。実は、伊勢神宮にもこの神様は祀られていないのです。祭神はこの阿智神社が唯一の神様なのです。伊勢神宮と言ったら天孫系ですから、ひよっとしたらこの神様は渡来人ではないだろうか、と私が観光向けに言っていますが。その天八意思兼命は「天の岩戸」に隠れていた天照大神を岩戸の中から導き出す方法を考えて指示し、再び昼の明るさを取り戻させた知恵の神様で、この神様が天降りた地と言われるところから「昼神」と呼ばれるようになったと伝えられている訳です。

そういうところに温泉が出て、昼神温泉がこの30年間のうちに飛躍的に発展してきたのです。最初は、温泉の泉源権を誰が持っていたのかということについて、この集落にいる方達が「公共の財産」と考え、今は、全ての温泉の配当権は村が所有しています。

もう1つ、実はこの場所は戦後山林が荒廃していました。近くに恵那山がありますが、この山の周辺を伐採をしてしまったので、20年代後半から30年代にかけて阿知川が荒れまして、この地帯は水が尽くようになりました。昼神温泉のあるこの辺りは一面煙草畑だった訳です。今、山は治まっていますので、水害の心配は殆どありませんが、災害復旧で農家の皆さんが借金を抱えていました。そこで、温泉が出た時に飯田市の不動産業者の人達が、この煙草畑を買い占めてしまったのです。それで、村が温泉権を持ち、土地は飯田の不動産業者の方達が押さえたということになりました。今考えれば、実は都市計画も何にもなかった訳です。もっとしっかりとした考えを持っていたら、都市計画を作っておけば良かったと思いますが、その時は知恵も何

もありませんでした。それと同時にもう1つは、この非火山地帯に温泉が出るということについて誰一人信用していなかったし、出たとしてもいずれ温泉はなくなるであろうと当時の人達は考えていました。

そこで、温泉場が出来るなんて誰も考えていませんでした。まず、考えられたことは村が保養センターでも作って、お年寄りに温泉に入ってもらおうということでした。でも、赤字は作ってはいけないから公社として単独でやりなさいと。こういう話になった訳です。

温泉がいつなくなるか分からないということで、当時はまだバブルの入口のところでしたから、そうは言っても折角出た温泉だから何とかしようということになりました。昭和48年に温泉が出て、村が温泉権を持ち、地元の皆さんの了解を得て、村で温泉を掘る訳ですが、最初に掘ったのは大体38m位で、掘ったら温泉が出た訳です。それを掘られたのが浜田さんのお父さんです。実は色々ありまして、最終的には浜田さんが掘られたのです。

温泉の量が多いので、「これはひょっとすると」ということで色々考えを持った人がいました。まず、地元で農業をやっていた方々が温泉旅館を始めたのが3つか4つありまして、大体50人以下の定員の小規模なものです。2番目は建設業者がホテルを建設しましたし、3番目に入ってこられた方は、飯田で料亭をやっていました。そういうことで、観光業や旅館業の経験のある方が1人として入ってきて開発した訳ではないのです。例えば、阿智村出身の方が東京などで成功し、帰郷してホテルを作るとか、そういった形ですね。

地元の皆さんから言えば、先程まちづくりについて水上課長から話がありましたが、行政もやっと地元の皆さんと一緒に温泉地を作っていこうという感じになってきました。その当時の考えとしては、出稼ぎに来た、温泉地に稼ぎに来たというのが旅館関係の皆

さんの考えです。そして、我々はどちらかと言えば、被害者意識があったことも事実です。そう言った状況の中で、どういう風な温泉地にするかという形で、地元の皆さんと村と知恵を出し合いました。そして、出た結論が健全保養型温泉を作ろうということでした。

当時は、ご存知のように歓楽温泉地が絶好調の時代でした。そういう中で、地元の皆さんが、歓楽型の温泉地を作ってもらっては困ると、皆で健全保養型の温泉を作ろうということでまとまりました。これが今でも課題になっていて、提言が活かされてはいませんが、一応歓楽型の温泉地にはしないということは確認されています。そういう点で、都市計画が何も出来ていない温泉地が出現してしまったのです。しかし、この健全保養型温泉地を目指す方向性は間違っていなかったのです。ちょうどその頃は、お年寄りの皆さんの年金が段々と増えたり、女性の皆さんの小グループ旅行が飛躍的に伸びた時期でして、男の不健全な温泉旅行に替わって女性の皆さんの健全な旅行の重要視されるようになりました。まさに、健全保養型温泉地ですね。

お年寄りの皆さんが来ると、必ず喜んでくれてお土産を買って帰るのですね。今は幾分下がりましたが、それでも倍々と増えているのです。昭和50年代はそういう形で進み、60年代に入りますと、いよいよ自信をもってやっていく訳です。昼神温泉の大型化が進むことになるのです。その時から、宿泊客が30万人、35万人、40万人と年々と増えていきました。

昭和63年のことですが、地元の皆さんとお話をして、昼神温泉で風俗営業をできないようにしようということで、村で風俗営業を規制する条例を作りました。実は、国の法律を超えて、市町村において条例で規制をすることは、公安委員会にとっては面白くないのですね。公安委員会から電話がありまして、「いらんことされちゃ困る」と言われました。

警察は、問題が起きてから処理するのです。問題が起きてしまったら終わりなのです。ですから、入ってくる前に「ダメだ」ということを言わないといけません。ダメだということは我々と地元の皆さんの考え方でありまして、風俗規制の条例が出来たのです。条例を作って、ペナルティがなければ意味がありません。そのペナルティというのは何かというと、温泉の分湯権を村が持っているのです。村の条例に違反した施設には温泉の分湯を停止するという罰則をかけました。それから、コンパニオンについても、旅館の皆さんと地元の皆さんと村とが入りまして、コンパニオンを判定する会議を作っている訳です。暴力団と関係ないかとかですね。

こうして、昼神温泉は現在まで30年を経て発展してきましたが、今我々が課題として持っていることは、どこの温泉観光地でも同じ大きな課題でもあるのですが、「昼神温泉はこれからどちらの方向に進んでいくのか？」ということです。要するに、団体旅行は少なくなって、温泉だけを楽しみにして来るお客さんもどんどん減ってきた中で、昼神温泉はどうすれば良いのかということです。

それで、「まちづくり委員会」という委員会を作りましたが、昼神温泉の将来の方向として、名古屋や豊田などの東海方面に近いので、言ってみればまさに手軽な信州のコンビニエンス的な温泉地を目指すのか、あるいはもっと健康とか癒しとか、由布院のようにこだわりの温泉地を目指すのか、という模索を色々しております。しかし、基本的には信州の温泉地であるということ、そして周囲には自然があり、歴史があり、農業があるということで、これを最大限に活かす形で考えていく必要があると思っています。健康に特化をしたらどうなるかと色々研究しましたが、実は日本の場合は、健康に特化にしても温泉は公共的なサービスのために財源的措置がないのです。そういう財源的措置がないので、健康特化型の温泉地づくりというのは非常に難しいと思っています。

このように、今非常に迷いながらこれからの昼神温泉と阿智村の先をどうするのかと考えているところです。ここで、話を終わらせていただきます。ご清聴、ありがとうございました。

シンポジウム

昼神温泉のまちづくり

- コーディネーター：山村順次（千葉大学教授）
パネリスト：浜田眞之（地熱社長）
〃：伊壺真司（昼神まちづくり委員会副会長・清風苑社長）
〃：水上宗光（阿智村経済活性課長）
〃：市川栄一（草津町企画創造課長）

はじめに

平成17年5月13日に長野県阿智村昼神温泉で日本温泉地域学会研究発表大会が開催されるに当たり、学会常務理事会では昼神温泉の課題とそのあり方を考えるシンポジウムを企画した。地元の昼神温泉でも、すでにまちづくりに関する方向性をまとめた報告書を提示しているが、本日のシンポジウムを参考にしてさらにその内容を充実させ、1日でも早く実現出来ることから実行に移して、より良い温泉地域の形成を促進させてほしいものである。

このシンポジウムでコーディネーターを努めたものとして、議論に入る前にまず、昼神温泉の地域的特性を簡単にまとめ、その後パネリストの皆さんの御意見を伺い、フロアの会員からの質疑を受けることにした。なお、このまとめは記録テープの不具合もあり、発言内容が十分に把握されないことが多々あったので、発言者の内容をそのまま記したのではなく、パネラーの発言の趣旨を損なうことのないように留意しつつ、コーディネーターがまとめたものであることを御理解いただきたい。

昼神温泉の地域的特性

①昼神温泉は、第2次世界大戦後の1973（昭和48）年に開発された新興温泉地であり、戦後開発の温泉地としては、山梨県の石和温泉とともに2大温泉地のひとつと言われる。しかし、石和温泉のように、新興温

泉地が歓楽化することが多い中で、昼神温泉は行政当局の強い指導力と地元の協調もあって、歓楽化を排した規模の大きな温泉地として知られる。

- ②立地条件からみると、東京圏から離れていてその知名度は低いが、名古屋圏には近く、周辺に有力温泉地が少ないこともあって観光市場性は高い。近年、高速道路の整備と高速バスの運行によって、東京圏との結合を強めつつある。
- ③温泉資源的には単純硫黄泉が使われ、温泉の質の良さが観光客に高く評価されている。また、阿智村の温泉集中管理のもとに安定した温泉量が供給されており、その温泉を利用して日帰り温泉施設「湯ったりーな昼神」も誕生し、日帰り客が増加している。
- ④地域内には、大規模な旅館が数多く立地しているが、その経営者の多くは周辺地域からの進出者であり、開発初期には大変な苦労があった。その建物を見ると、景観的に比較的周囲と調和しており、評価される。公営宿舎も多く、宿泊料金もバラエティに富んでいて各客層に対応しているし、連泊客もかなりいる。
- ⑤昼神を特色付ける朝市は、地域の産物を販売しており、年間休み無しのユニークなものである。
- ⑥昼神温泉周辺には、恵那山・富士見台・ヘブンスそのはら・信濃比叡・花桃の里・神坂神社など古代東山道の史跡・伍和観光果

樹園などの多くの観光ポイントを有し、さらに近隣市町村には天竜峡・妻籠・馬籠・駒ヶ岳・高遠など数々の観光地が分布しており、広域観光の拠点となる。

以上の概観を踏まえて、まず、最も大事なまちづくりについて、今後この昼神温泉郷で今すぐ出来ることは具体的に何なのか。温泉地域の活性化につながるまちづくりについて、提言をお願いした。以下、発言順にその内容をまとめた。

パネリストの意見

浜田眞之（昼神温泉の温泉掘削と温泉利用の計画を実行した開発会社・地熱の社長）

まちづくりとして、昼神温泉・阿智村に関わっているものとして、一般的な話をして、昼神とのこれからの関わりを話したい。私は温泉の調査・掘削・開発・工事もやっているの、温泉のまちづくりのアドバイスもする。そういう時に痛切に感じるのが、地元の方が、何がどこにあるということを外部の人より当たり前だが、よく知っているということである。しかし、不思議なことに、それが外から来た人間にどういう感動を与えるかとか、どういう価値があるかということは、毎日見慣れているせいもあって、あまり感動を持たないという不思議な傾向がある。

実は駒ヶ根にある早太郎温泉の開発に関わったことがある。その時、光前寺に素晴らしい三重塔があったので、それを駒ヶ根市の観光の方々に「本当に素晴らしい建築物ですね」と誉めちぎったが、駒ヶ根の役所の人は「はあ」と言うだけで、殆ど感動されなかった。見慣れているせいもあるけれど、外から見た人間にとって、素晴らしい感動を与えるものだということが分からない。というか、当たり前ものになってしまっているために分からないのである。こういうことは、駒ヶ根だけではない。

自分達の足元にある観光資源をどうやったら第3者の目で見ることができかと考える

と、観光資源そのものを上手に活性化していく道に繋がると思う。それは以前、由布院でも同様の議論をしたが、由布院にしても黒川にしても長湯温泉にしても、大体温泉地の発展に寄与した方々は、一旦、外の世界を経験して別の視点に立ってしまった方々が貢献をするようである。これは由布院のある女将さんに聞いたことであるが、自分の旦那がドイツに行って帰ってこないから、2ヵ月ばかりボーっとしていたそうである。あの時、夫はどうやら「これから由布院はどうあるべきか」ということを頭の中で模索していたに違いないと思い、自らも由布院のあり方の考えをめぐらせた。実際、その後にとられた行動は、外から見た由布院、自分達の価値は何なのかということを経験されて、温泉地づくりに邁進されたのである。だから、中の人間が外に行くなりして、外からの視点を中の人間に伝え、意見を言ったり考えたりして、中の、すなわち地元の間が自分で自分の立場を見つめ直して、上手く活用することがこれから最も求められるのではないかと思う。

伊壺眞司（昼神温泉旅館共同組合理事長・昼神まちづくり委員会副会長・清風苑社長）

現在、昼神温泉は年間80万人の観光客に出向いていただいている温泉場になったが、そうした中で、今年は愛知万博があり、万博会場まで1時間少しで行けるという立地のいい温泉場と期待しながら、大いに胸算用している最中である。しかし、今年の万博後を踏まえて、それ以降の昼神温泉郷をどう作りあげたらいいのかということが、これからの課題として非常に大切なところだと考えている。現状に満足しては、危険なことがいくつか潜んでいるので、その話を若下させていただきたい。

まちづくり委員会は村長から依頼を受けて、昼神温泉のまちづくりはこのままではいけない、折角先輩諸氏の皆さんが30年間にこれまで築いてきてくれたこの温泉郷をどうすれば活性化できるのかを新たに検討してい

るところである。昼神温泉郷は、先立って全国温泉100選において17番目ということで、大変に高い評価をいただいた経過がある。その中身については、当然、関係者の努力もあるが、やはり1番は源泉の良さに要因があると思う。それに甘えているところが私共現場で働く者にとってはあると思うが、それではいけない。今やらなくて、改革・変化を求めていかないと何時やるのかということまできている。しかし、一体何をやれば良いのかが非常に悩む点である。経済環境が厳しい中での営業を余儀なくされ、これが当たり前となっている時代の中で、どうしたら健全な経営をしていけるかが問われている。当然、多くの客を迎えることは必要であるが、それと合わせて適正な料金をどうやって頂戴していくか、適正な料金を頂くためにはどういうサービスを提供すればいいのか、その辺を踏まえて今、色々な面から考えている。

そのひとつとして、「^{くぐ}神^し和^の里 昼神温泉」という新しいキャッチフレーズを考えている。「^{くぐ}神^し和^の里」というのは、「神々が宿る和風の温泉」ということで、このコンセプトでこれから組み立てていく。そのため、委員会に5つのプロジェクトを設けている。現在、新しいスタイルのガイドブックの作成を検討している。客が昼神温泉を訪れた時に、ガイドブックに即した地域ガイドをしていこうではないかと考えている。それは地元の観光資源の再開発、その活性化ということでもあり、阿智村近辺の新しい観光資源を発掘するプロジェクトもスタートしている。私と一緒に仕事をしようと言っただけの皆さんの悩みは、新しいことに挑戦するにはどうしても調整に手間が掛かかるといことである。

現在22軒のホテルが営業しているが、各ホテルそれぞれの営業スタイルが違っている。営業スタイル・営業方針が違う中で、同じコンセプトの下に温泉郷を作り上げるといことは非常に難しい。しかし、やらなくて

はいけない。どの辺りで我慢をして皆さんの意向を取り入れていくかという難しいところであるが、やはりリーダーシップを持った人が物事を見極めて進めていく必要があると考える。私達は行政の意見を仰ぎながら、それに加えて予算の援助をいただきながら、何とか「神々が宿る和風の温泉」を目指して、早い時期からスタートを切っていけたらと考えている。つい最近、昼神温泉場内に花を植えた。街路に沿った花があるが、これも私達の気持ちの表れである。

さらに将来、長期的にこの昼神温泉を売っていけるような観光資源を何とかしなくてはいけない。「歴史の里 昼神」ということで、歴史とロマンに富んだ信濃比叡がこの奥にあるが、その称号をいただけるにも今まで多くの関係者の大変な苦労があったという経過がある。そのような関係で、そちらの方と一体となつてのプロジェクトが進み、現在本堂を建立中ということで、近い将来、昼神温泉の大きな目玉となるのではないかと考えている。

それ以外にも、当然「^{くぐ}神^し和^の里」にマッチした阿智神社を活かしていきたいと考えている。以上、いずれにしても現在3つの熱い思いを持って昼神温泉のまちづくりを進めている。1つは健康づくり温泉、2つめは親切温泉、3つめは環境温泉である。現在、強い熱意のもとに昼神温泉の皆さんが目的を1つにして頑張っている。それにしても現在、この長野県で1番人気の昼神温泉があるのは、先代から始まって、多くの関係諸氏の皆さんのお陰である。私達の代で途絶えさせるといことは絶対に許されないので、本日ご出席の皆さんの知恵を拝借して、さらにより良いものにする為に頑張っていきたいと考えている。

水上宗光（阿智村経済活性化課長で、昼神温泉のまちづくりに関する行政側の実質指導者）

昼神温泉発展の経過については、1つは温泉の管理を地域の方々皆んなで出来たという

こと、もう1つは健全保養温泉地、簡単に言えば、歓楽化しないということの2つであると感じている。

これからどうするかということであるが、まちづくりが本格的に始まったということなので、今置かれている現在の位置というのが、今までやってきたものの一応の形が出来、これからどういう方向に進むのかを考えている時期だと思う。そういった点で、今後どうするかということについては、皆で考えていきたい。行政と地域の方々と1つのテーブルで議論をしている。この会議の中で、新しい方向性を見出すまで議論をしていかななくてはならないと思っている。

今は日帰りのお客さんに目を向けている部分があるが、宿泊されているお客さんを何とか滞在させていくことが大切だという話もある。まず、この問題を何とかしたいと考えている。そのひとつの方向として、健康というテーマを視野に置いて、健康保養温泉地という方策を出していきたいと思っている。健康づくりを基本にすえた先駆的な温泉地がなく、現在村としてはそのあり方を模索している状況である。

また、温泉開発から30年経ったということもあって、村直営の宿泊施設が改築の時期を向かえている。昼神温泉の将来に役立つような方向でやりたいと言っているが、その方向がどのようなものかがなかなか決まっておらず、問題が棚上げされている状態になっている。しかし、同じテーブルで話し合いを持つことで、一緒に考えられるようになったというのが今の状況であり、以前と比べて大きな前進だと思う。

市川栄一（草津町企画創造課長で、各種イベントや活性化策について積極的に事業を展開）

草津は何処に行っても「温泉で有名な…」からはじまって、非常に良いところだと言われる。良い環境にあるとは言っても、私は決して満足していない。トップを走る者は常に

新しい何かを追求したり、新しい話題を提供していくことが大事だと思っている。

バブル崩壊後、基準が厳しくなり、草津は全国の行政に先駆けて管理職などの賃金カットが行われた。行政の人達はどのような風になったかと言うと、皆何をしたらいいのかわからないという状況が続いた。こうした中で、平成14年7月1日に企画創造課という新しい課が出来て町長から任命されたが、「企画創造課とは一体何だろう」と考えた。「全て住民が良くなることを、ありとあらゆることを自分なりに考えていけばいいんだ」と考えて、「よし、好きなことをやってやろう」という形で事業を進めてきた。

私の意見としては、観光地において非常に大事な施策というのは、まず国が何を求めているかだと思う。そこに歩調を合わせて、たまたま平成14年と言うと、国土交通省の観光立国という施策を新聞で見つけて、すぐに国土交通省に電話した。「キャンペーン候補地には是非草津を入れて下さい」と頼み込んだら、願いが通じて、早速色々な施策を打ち出すことが出来た。

昼神温泉の水上さんと知り合ったのは、昨年の草津での日本温泉地域学会「温泉観光士」養成講座のときで、それから色々な話をしたが、水上さんは他の人達とはちょっと違うなと思った。その後のお付き合いで、本当にその通りの素晴らしい実行力がある方だと思う。水上さんも言っていたが、温泉と健康づくりという問題については、草津も非常に重要な問題であると認識している。そこで、草津はウォーキングに目をつけた。平成13年に第1回ウォーキング大会、その時は350人が参加した。平成16年に第2回ウォーキング大会をと日本ウォーキング協会の会長に言われるがままに実行して、その時の参加人数は約1,000人に達した。今までのウォーキングは都会の街の中を歩いていた。私達の草津という町には温泉がある。「ウォーキングと温泉を結びつけたら、健康に良いことだか

らどうでしょうか」と言ったら、会長がその意見を取り入れて、今まで日本ウォーキング協会で行ったことのない、温泉とウォーキングを組み合わせた温泉リーグを設立しようという形で提案され、昨年準備会が開かれた。北海道から九州まで5大温泉地域を選び、温泉リーグが九州の小国町からスタートする。草津は7月の7、8、9日にウォーキングを立ち上げる。このように、ウォーキングを通じた健康という施策をとっている。

また、草津営林署も国との協議を行い、国有林の活用に積極的に対応してくれた。草津の外周は90%が国有林に囲まれているので、国と一緒に遊歩道のコース整備を行った。「国がお金出して遊歩道を整備したのは草津だけだよ」と言われた。

常に話題の提供が大事だと思う。総務省の提案事業で良い案を募集しており、良ければ1,000万、1,500万、2,000万の補助金が出るというので、私は散策ナビゲーションを提案した。携帯電話で自分がいる地点の近くに何があるとか、携帯電話で簡単にナビゲーションが出来るというものである。詳しくは、草津町のホームページに載っているのので、それを見ていただくと良いと思う。それが採用になって、1,500万円を国からもらって整備したら、テレビや新聞で報道された。

このように、まちづくりにおいては、自分の中で満足する施策ではなく、今まで誰も発想しなかったような施策を考えていかなければならないと思う。草津の温泉をより高くするという観点から今施策を立てている。その例が、温泉の温度を活かした温度差発電を昨年整備させたことである。5月1日に記者発表するつもりであったが、町長が忙しくて月末になってしまった。中旬頃に鳥取か何処かに先を越されて二番煎じになった。今年は実用機を作るが、これは世界初ということで話題になる。その他、草津温泉には、金・銀・銅、それからスカンジウム・バナジウム・砒素が採れるかもしれない。これが採れる技術は、

日本原子力研究所が開発し、現在共同研究で実用化に向けて実験を進めている。

何かで稼がないと、施策を考えても実行に移すことが出来ない。自分たちで稼いだお金で手を打って、知恵を出し合い、草津をさらにお客さんに満足していただけるように、常に毎日頭をフル回転させて考えている。

フロアーからの意見

- ・山歩きが好きで、温泉に入ることが好きであるが、山の紹介が詳しくない。朝夕は冷えるので、時間別の詳しい気温変化なども明示してほしい。(八岩まどか)
- ・昼神温泉には温泉街がない。温泉そのものが見えてこない。温泉についての看板を掲示する必要があるのではないかと。(古田靖志)
- ・昼神に湯権現はあるが、薬師さんはあるのか。(梨本修造)
- ・宿泊した旅館だけではなく、他の旅館の温泉のも入りたい。湯めぐりのサービス券1枚を配布すると良い。(安達清治)

これらの意見に対し、地元の水上市・伊壺氏から、できるだけ意見を取り入れるよう尽力するとの回答があった。

また、水上市からは学会員に聞いた昼神温泉の印象は、①空間が広い、②街がきれい、③泉質が良いという3点が高く評価されたことが紹介された。そして、観光は経済的視点からだけではなく、地域住民が誇りを持てるような文化的視点が重要であり、さらに地元の食材を共同で使うことが大切で、「昼神の旬を味わう」旗を立てることなど、仕掛けが今後の課題であるとの意見が述べられた。

まとめ

昼神温泉のまちづくりについて、岡庭村長の基調講演に続いてパネリストの方々やフロアーの会員から貴重な意見が述べられた。これらを踏まえつつ、コーディネーターとしての私見を加えてまとめれば、以下のようであ

る。

- ①「まちづくり」、すなわち地域活性化は観光業者・地域住民・行政が一体となって進められるべきものであり、現在展開されつつある昼神まちづくり委員会の役割は大きい。さらに、積極的に会合を持ち、出来ることからすぐに実行に移すことが大切である。人材育成こそ、緊急の課題である。
- ②阿智村当局が提示した昼神温泉のあり方において、健全保養型温泉地が重視されているので、質が良いと高く評価されている温泉を健康増進（ウエルネス）に活かし、持続可能な温泉地域社会を構築することが望まれる。そのためのハードのひとつは、「湯ったりーな昼神」温泉施設を活用するとともに、各旅館の温泉浴場においても、観光客や地域住民が気軽に参加できる温泉入浴による健康メニューを提示して、保養滞在型のソフトを確立することである。そのためには、温泉療法医や健康・運動関係者の指導を受けることも必要となろう。
- ③現在でも、温泉地での保養を志向した連泊客がかなりいるので、滞在中の彼らへのサービスを提供することが望まれる。その具体策として、「湯ったりーな昼神」入浴券の配布と温泉地と周辺を巡る地域ガイドをすぐにでも実行することである。コーディネーターの山村とパネリストの浜田氏は、2年前から昼神まちづくり委員会のアドバイザーとして参加しており、地域ガイドの実施とその際に利用するガイドブックを作成することが必要であると提言してきた。これを使いながらガイドと参加者が地域を巡れば、昼神温泉の評価は高まるであろう。幸い、本年7月にガイドブックは完成した。
- ④新規観光市場の開拓を展開することが、万博終了後の課題である。名古屋圏に依存した現状から首都圏や関西圏への市場拡大を推進することである。高速道路によって東

京の西郊は近接性が高まっている。家族や小グループでの温泉旅行が盛んな今日、口コミ重視による地道な宣伝が効果をもたらす。

- ⑤昼神温泉は新興であるにもかかわらず、歓楽を排した健全な保養型温泉地を志向してきたが、今まさにその方向性にマッチした温泉需要が引き起こされている。地域の景観を保全し、心身を癒すことができるような温泉地域の空間整備が進められようとしている。阿知川にごろごろしている石を積んで基礎を築いているホテルで、その石垣の上に一面に日本蓼を這わせて緑化している見事な光景を見るにつけ、環境保全意識の高まりを感じる。
- ⑥今後は昼神温泉地域内だけではなく、阿智村内の地域観光資源の発掘とその活用が求められる。現在、農業地域としての伍和地区でリンゴの観光農園が開設されているが、最近、春先には座禅草と福寿草の群落が観光客に提供されるようになった。また、横川地区は棚田などを残す秘境としてのイメージが強く、地元民も農業体験民宿経営へ意欲を強めている。このような農村景観の保全と活用も視野に入れての施策が大切である。さらに、村の中心街を形成する駒場地区は、江戸時代の中馬の旧宿場町であり、今もその名残がある。酒蔵やユニークな郵便局舎、信玄ゆかりの長岳寺など、見どころが多い。現在、空き家の観光的利用は検討されており、その実現を期待したい。

なお、昼神温泉の開発過程と温泉地域の現状、観光客の実態、街づくりのあり方などについては、次の論文にまとめて発表したもので、参考としていただきたい。

山村順次（2005）：「長野県阿智村昼神温泉の地域的特性と活性化」千葉大学地理学研究報告、16号、1～9頁。

（山村順次記）

資料

温泉感性論に向けて－折口信夫の「山の湯雑記」

森 繁哉（東北芸術工科大学）

1 折口信夫の視線から

折口信夫が昭和11年「婦人公論」に発表した「山の湯雑記」は、温泉というものの存在を、私たちはどのように捉え、それをどう自分に向き合わせていくかという問いに向かって、たくさんの示唆を提供する。折口信夫の学を私は、私たちの身体の変化に供応し生成し続ける「増殖する知」と位置づけている。この「山の湯雑記」には、実際的にも折口が実にさまざまな温泉地（この時代にあつては湯治場と読み替えてもいいのであるが）を移動し湯治体験をしながら、その場で生起する土地の印象を自己生成に置き換えていくという彼の姿勢を読み取ることができる。

「最上の高湯は、何にしても、人がこみ過ぎる。出羽奥州の人たちは、湯を娛しむと言うより、年中行事として、尠くとも一週間なり、半月なり、温泉場で暮らすと言う風を守っている。そうして村々から、女房たちや若い衆が、大きな荷物を背負って、山を越えて来る。最上の湯は、其ばかりか、温泉その物が、利きそうな気をさせる。其ほど峻烈に膚に沁む。」

これらのくだりは、東北の温泉場の年中行事的な湯治の賑やかな風景描写と捉えてしまいがちであるが、折口の直感には単なる風景の観察に留まっているのではない。その後折口は、こんな歌を詠んでその文を繋げていく。

「一昼貌の華 今日ひと日萎れねば 山の雨気に 汗かきて居り一最上の湯でのものだったと思うが、歌の方が却て、少し鄙びた感じを出し過ぎて居るようで、よくない。ひょっとすると、蔵王の山を一つ隔てた向う側の青根温泉で出来たものかも知れない。創作動機など言うものは、瞬間に通る過ぎるも

ので、こんな部分までも、記憶に残らないこともあるのである。」

歌人でもあつた折口は、湯治場の盛況の印象を昼貌に投影して、賑やかさの華の裏に潜んでいる、ひっそりした静かな佇みを見過さない。湯治場は、常にハレ的時間の流れに満たされていて、いつ時人々は、日常時間から解き放たれようとして飛躍して、湯を賑わいのるつぽにしてしまうのであろうが、やはり湯に入るという行為は、もう一方では、安堵や緩やかな佇みの中に自己を置くことであるのではないかという主張が伝わってくるのである。そして折口は、この歌の前章に、「最上の湯は、其ばかりか、温泉その物が、利きそうな気をさせる。」と書いている。

効能書きなどが明確に表示されていた時代ではないだろう。それでも人々は、その湯が自分の体質に合うかどうかをあいまいに念じながら湯治場に通いつめたのであろうか、折口はここでも温泉を、人々の存在性の深さの領域から捉えようとしている。あくまで「利きそうな気」がするのである。対象に向かって断定（分析し比較し、決定する）するのではなく、そのように思われているという集合的な無意識層に佇む、人々のあやふやであいまいな意識の在り方に重きを置いている。この折口の状況把握の方法は、私たちに、自己の身体というものの在り方や、それを浸す湯というものの存在の根拠を解き明かすに十分な筋道を、示しているように思える。

2 湯に入るという行為

折口にとって（ということは折口の日々留まった当時の人々にとって）湯治場に行くという行為は、利きそうであると思ひ信じられ

ているある状態に、自己を投棄することなのである。明確に限定づけられたひとつの効能という価値に自己を結ばせるのではなく、その周辺を漂うようにして集合し、なんとなくそのようなものであることの場の不確かさに、自己を置いていくという行為が優先されるのである。そして昼貌の花が、山の雨気にひっそりと濡れているように、湯に入るといふ行為は、密かに自分が、自己の身体に目をやり反芻する、そういう時間を費やす行為ではないかと、折口は問いかけているように思える。この湯の享受の仕方受け入れ方は、湯が押しなべて目的性に奉仕してしまいかねない現代の温泉状況を、深く衝いてくる。

現代にあつて温泉は、効能という明確な規程に脅かされている。又温泉地は、あやふやな情緒性を消去され整合されて、ランクづけの基に、温泉地そのものが唯一性に引き込まれ、おしなべて単一な方向に流されてゆかざるを得ない状況に置かれている。しかし、人が温泉地に行く、温泉に入るといふことは、明確な目的性に奉仕するだけではないのだろう。それは自己の反芻なのである。折口が詩人の優れた感性で切ってみせたように、温泉は自己の深い身体の混沌（捉えどころのない部分、あるいは両義性）に、自分が降り立つという行為を引き受けることではないか。

人は人間の裏側を、どこかで開示しなければならぬ。日常のさまざまな約束や目的性から離れ、人はどこかで自分という人間の奥深い情動の部分に直接接触れる行為をしていかなければならぬ。その行為の発露が、旅であつたり、仮に祭りであつたりするのであろうが、この情動の壁の部分で反転させ、もう一度自己を復帰させる役割を持っていたのが、温泉というものが持つ力ではなかったのか。その保障を、囲われた温泉地という場所、安心してながら実現できることが温泉に行くことの最大の楽しみであつたのではないだろうか。そして自己の周辺を漂うようにして、不確かなものに触れていく確認が、温

泉に入るといふことだつたのかも知れない。賑やかさの一方で、身体の混沌をどこかで保障する回路を持っているということが、温泉場にはどうしても必要であつたのであろう。

利きそうであるという、あいまいで不安な情緒を保存しながら、賑やかさの裏に潜むひっそりとしたもうひとつの領域を人の身体に返してよこす装置、それこそが自己を統合し回復する、繋ぎの回路として温泉が自己に機能するのであつたのではないか。だから人は何度も何度も温泉という場に吸い寄せられていくのかもしれないと、折口は問うているようではない。

仮に折口が示した、自己と温泉の結ばれ方を「感性に開かれた温泉」と定義するならば、この感性を捨ててしまうのが近代における温泉地形成の方法だつたと考えられる。温泉は、機能に奉仕し、数量化に晒される一方、あやふやであいまいな感情、情緒を一定方向に誘導する近代主義の流れの中で、ひとつの目的に突き進むことになった。混浴が廃止され、湯質が重要視され、観光客という数字がすべてを支配する温泉地の神にもなってしまった。しかし、前述したように温泉は、感性といわれる、人間のあいまいであやふやで捉えどころのない情動を引きずりながら民俗社会に浸透した優れた認知装置である。人々はややもすると過剰に動く自己の身体を手なずけ、温泉によって導かれながら自己を統合し、そして回復を果たしてきたのである。そして、そういう生命運動をきっちり引き受ける場が温泉地だつたのであろう。しかし、温泉は健康や癒しの場という記号に置き換えられ、そういう役割を担うものとしての意味を与えられてきたのがこの時代の近代の温泉感だつたように思える。そういう状況の中で、温泉というものが持つそんな根源的な力に、再び人間の感性の方向から極めて有効な問いを投げかけていった評論が誕生するようになる。

文献：折口信夫（1936）：「山の湯雑記」。婦人公論、21巻、90頁。

学会記事

●日本温泉地域学会第6回研究発表大会

来る11月13日(日)・14日(月)の両日、日本温泉地域学会第6回研究発表大会が福島県福島市土湯温泉で開催されます。土湯温泉「湯遊つちゆ温泉協同組合」の協賛のもと、下記のようなスケジュールで実施しますので、多くの会員の参加をお願いいたします。

日本温泉地域学会第6回研究発表大会スケジュールとプログラム

開催温泉地：福島県福島市土湯温泉

協賛：湯遊つちゆ温泉協同組合

開催日：平成17年11月13日(日)～14日(月)

会場：土湯温泉「山水荘」(TEL.024-595-2141)

受付：11月13日(日)12:30～13:00

11月14日(月)9:00～

参加費：一般会員・賛助会員2,000円、学生会員1,000円、その他1,000円(資料代)

懇親会費：会場は「山水荘」、会費は5,000円(学生会員3,000円)です。

なお、学会で宿泊予約をした場合、懇親会費は宿泊費に含まれています。

宿泊費：学会で予約の場合、懇親会費・朝食費込み、2名1室で1万2,000円です。

11月13日(日)13:00～17:30 視察会(無料)

土湯温泉会場～高湯温泉～磐梯吾妻スカイライン～鷺倉・新野地温泉
～土湯温泉場内～会場

17:30～18:30 休憩

18:30～20:00 懇親会

11月14日(月)9:30～11:50 自由論題研究発表6件

11:50～13:00 昼休み(記念撮影・理事会)

13:00～13:30 基調講演「持続可能な保養温泉地づくり」

13:30～13:40 休憩

13:40～15:00 シンポジウム「保養温泉地の課題とあり方」

交通案内：東北新幹線福島駅西口下車。13日(日)に下記列車で来られる場合は、駅西口前の送迎バスにお乗りください。その他、路線バスは東口から出ています。所要45分。

東京発「やまびこ157号」10:44→福島着11:43

仙台発「やまびこ110号」11:08→福島着11:39

自家用車の場合、東北自動車道福島西IC下車15分。直接会場へお越し下さい。

宿泊：学会で宿泊申し込みの場合、宿舎は「山水荘」と「土湯温泉ホテル」です。

会費納入：大会参加者は、事務軽減のため参加費・宿泊費・懇親会費などを11月5日(必着)までに、学会事務局宛てに郵便振替で前納してください。

振替番号：00190-6-462149 加入者名：日本温泉地域学会

研究発表大会プログラム

11月14日(月)

自由論題 発表時間：20分(発表15分、質疑5分)

座長：長島秀行(東京理科大)

9:30～9:50 中山昭則(別府大)：別府地獄観光の展開と現状

9:50～10:10 浦 達雄(大阪明浄大)：高度経済成長期における別府温泉の地域形成

10:10～10:30 大山琢央(別府大大学院)：熊本県山鹿温泉の地域変容－山鹿温泉館「さくら湯」の改変問題を通して－

10:30～10:50 休憩

座長：中山昭則(別府大)

10:50～11:10 谷口清和(あおもり温泉地活性化研究会)：青森県における温泉調査と活性化への取り組み

11:10～11:30 宮井久男(岩手県立大)・大信田康統(もりおか障害者自立支援プラザ)：ユニバーサルデザインによる温泉地形成の現状と課題－岩手県における身体障害者アンケートを中心にして－

11:30～11:50 前田 勇(立教大名誉教授)：「温泉地評価」の現状と課題－複数の温泉地評価等を手掛かりとして－

11:50～12:00 記念撮影

12:00～13:00 昼休み(理事会)

基調講演

13:00～13:30 山村順次(千葉大学教授)「持続可能な保養温泉地づくり」

13:30～13:40 休憩

シンポジウム

「保養温泉地の課題とあり方」

13:40～15:00

コーディネーター：森 繁哉(東北芸術工科大学教授)

パネリスト：渡邊 久(湯遊つちゆ温泉協同組合理事長)

”：富永 滋(千葉大学大学院生)

”：布山裕一(日本温泉協会事務局長)

- 日本温泉地域学会第5回総会・研究発表大会は、5月12日(木)・13日(金)の両日、長野県下伊那郡阿智村昼神温泉で開催されました。阿智村の協賛、昼神温泉旅館組合・阿智村観光協会の後援のもと、盛会裏に終了しました。初日は地元関係者のご協力、村内で観光農業が盛んな伍和地域、信濃比叡・古代東山道・神坂神社などの史跡、広域観光にとって重要な妻籠宿を加えた視察会を催行していただきました。

山梨県の石和温泉とともに、第2次世界大戦後の2大新興温泉地としての昼神温泉は、スケールの大きな温泉集落を形成しています。岡庭村長は歓楽施設を排除する条例を公布したほどであり、1年中朝市を開いていた、大小のバラエティに富んだ宿泊施設が整備されています。

さらに、大型旅館であってもいずれも建築様式や色彩などの景観保全にも配慮しており、入湯客の心身の保養の場として最適の温泉地のひとつであるとの印象を強く受けました。

研究発表大会では、自由論題6件のほか、岡庭村長の基調講演「阿智村の観光政策」をうけて、シンポジウム「昼神温泉のまちづくり」が行われました。特に、村長の話の中で温泉開発の当初、名古屋方面の大手資本に温泉経営を依存し、その来訪を心待ちにしていた地元の人々が、会社側が約束の日に偶然に大雪で来れなくなった際に、夜通し議論をして村当局を中心にした地元本位の温泉管理をすることに決定したという秘話が明らかにされました。

また、シンポジウムでは草津町役場の市川企画創造課長が、草津温泉の発展策を例に実行力の有無こそが重要であるとの発言があり、阿智村の水上経済活性化課長も新たな「昼神温泉の将来とまちづくり委員会」の活動が軌道に乗ってきたことを紹介して、共感をえました。

- なお、研究発表大会に先立って、学会員の講師による昼神温泉「温泉観光士」養成講座が開かれ、50名を超える受講者に学会認定の「温泉観光士」を授与しました。さらに、7月下旬には草津温泉でも、昨年第1回「温泉観光士」養成講座に引き続いて開催し、盛況でした。今後とも、各温泉地でこの事業を広げていく所存です。
- 日本温泉地域学会第7回総会・研究発表大会は、平成18年5月中旬～下旬頃に静岡県伊豆の国市の伊豆長岡温泉などの諸温泉地を会場にして行う予定です。

日本温泉地域学会入会申込書

平成 年 月 日

会員種別	一般	学生	賛助 () 口
ふりがな 氏 名	印 (満 歳) 男・女		
団体名・商号 代表者名	印		
勤務・所属先名称			
所在地	〒		
	電話	()	
	FAX	()	
E-mail :			
現住所	〒		
	電話	()	
	FAX	()	
E-mail :			
研究・関心分野			
メールでの対応	可能	不可能	
研究会誌送付先	勤務・所属先	現住所	

* 学生会員は学生証の写しを同封してください。

事務局受付日： 年 月 日

申込書送付先

〒 263-8522 千葉市稲毛区弥生町 1-33

千葉大学教育学部地理学研究室内 (山村研究室)

日本温泉地域学会事務局

電話・FAX : 043(290)2543

E-mail : yamamura@faculty.chiba-u.jp

郵便振替 : 口座番号 00190-6-462149 加入者名 : 日本温泉地域学会

日本温泉地域学会役員

会 長	山村 順次 (千葉大学)	
副 会 長	石川 理夫 (温泉評論家)	
理 事 長	浜田 眞之 (地熱)	
常務理事	長島 秀行 (東京理科大学)	
"	寺田 徹 (日本温泉協会)	
理 事	池永 正人 (長崎国際大学)	市原 実 (山梨県立大学)
"	浦 達雄 (大阪明浄大学)	菊地 莊悦 (東鳴子温泉まるみや)
"	首藤 勝次 (長湯温泉大丸旅館)	辻内和七郎 (箱根温泉供給)
"	中澤 敬 (草津町長)	布山 裕一 (日本温泉協会)
"	古田 靖志 (岐阜県博物館)	松崎 郁洋 (黒川温泉ふもと旅館)
"	森 繁哉 (東北芸術工科大学)	八岩まどか (温泉評論家)
"	由佐 悠紀 (京都大学名誉教授)	
監 事	音成 克巳 (阿蘇町温泉医)	中山 昭則 (別府大学)
幹 事	君島 俊克 (千葉大学大学院生)	小林 裕和 (ジェイ・ティー・ビー)
"	小林 浩 (千葉県庁)	下島 康史 (長崎国際大学)

任期：2003（平成15）年5月11日～2006（平成18）年春季総会

温泉地域研究 第5号

2005年9月30日発行

編集・発行者 日本温泉地域学会

〒263-8522 千葉市稲毛区弥生町1-33
千葉大学教育学部地理学研究室内

電話 043 (290) 2543

FAX 043 (290) 2543

振替 00190-6-462149

印刷所 株式会社 こくぼ

〒260-0843

千葉市中央区末広3-3-10

Journal of Studies on Spa Region

No.5
2005.9

contents

Articles

- Formation Process of Beppu Spas in the Modern Era Tatsuo URA (1)
- Tourism Development of "Jigoku(Hell Hot Spring)" and Jigoku Association
in Beppu Spas Akinori NAKAYAMA (13)
- Regional Change of Shima Spa as a National Health Spa
..... Takaaki KOBORI Junji YAMAMURA (23)
- Development of Dalian Longmentang Spa and Utilization of Hot Spring in China
..... Hang YU Junji YAMAMURA (31)

Lecture

- Tourism Policy of Achi Village Kazuo OKANIWA (41)

Symposium

- Formation of Tourism Region in Hirugami Spa (45)

Materials on Spa

- Sensibility on Spa of Shinobu Orikuchi in the Essay of "Yamanoyu Zakki"
..... Sigeya MORI (51)

- Notes and News (53)